

資料編

アゼルバイジャン語詩撰

石井 啓一郎 訳



I. アゼルバイジャン語詩撰 1

モハンマド・ホセイン・シャフリヤール詩撰

1. 「ヘイダルババ」

1) 第1部 (第1篇～第76篇)

2) 第2部 (第77篇～第125篇)

2. 「シャフリヤールに寄せる手紙」

ブルド・ガラ Cholル・サハンド作

3. 「サハンドよ」

4. 「時の声」

5. 「わたしは海をつくった」

061

II. アゼルバイジャン語詩撰 2

1. ヴァフティヤル・ヴァハブザーダ

「ギュリスタン」

2. ブルド・ガラ Cholル・サハンド

「ヘイダル・アリエフに宛てた韻文書簡」

資料として作成した翻訳には、大阪大学大学院言語文化研究科のベヘナム・ジャヘドザデ先生、在テヘランでイラン現代詩の第一人者カームヤール・アーベディー先生に多くの貴重なご教示をいただいた。両先生にここで深く御礼を申し上げる次第である。また訳者の誤解に起因する誤訳等はすべて訳者の責任である。

石井 啓一郎

モハンマド・ホセイン・シャフリヤール

ヘイダルババよ、ごきげんよう

Heydərbabaya Salam / حیدر بابایا سلام

本稿は『ヘイダルババ』第一部・第二部のアゼルバイジャン語本篇と、第一部初版刊行の際に作者自身が付したペルシア語の説明 Rāhnāmā-ye bakhsh-e nakhost-e “Heydar baba” be qalam-e khod Shahriyār（訳稿中には【作者注解】と表示）を訳出したものである。

第一部（1954年）

〈第1篇〉

ヘイダルババ 稲妻は閃き

瀬をほとばしる水は唸り

並んで娘らは仰ぎ見る

聳え立つ雄姿に 人々に ごきげんよう

わずかなりとも あなたが我が名も語らんことを

【作者注解】ヘイダルババとは邑にあった山の名前である。この詩のなかで、対話の相手として、そして諸々の出来事の証人として選ばれている。

【訳者注解】ヘイダルババはイランの現在の行政区画で東アーザルバーイジャン州ボスターナーバード郡ホシュゲナーブの邑にある山。イラン・アーザルバーイジャン州は、アラス河対岸にあるアゼルバイジャン共和国領ナフチワンがロシア、グルジアから繋がる小コーカサスの端にあたり、またサバラーン、サハンドの両峰を包含するイラン高原北西部の火山帯に広がる山系のなかにある山国である。ヘイダルババは、そのなかで特に際立つ特徴を持たない山ではあるが、この詩人の思い入れのこもった作品に詠まれたことで、アラス河南北のアゼルバイジャン人にとってアイコン的な存在となった。この注解の他、シャフリヤール自身が本作のペルシア語序文にも次のように記している。

山とは天により近く、そこは預言者に啓示がくだる処だ。山は他にぬきんでる自然の被造物。山の深い淵のなか、巖の臓腑から湧き出る水は、より清らかで、より澄んでいる。山は芸術家の天性と精励とに結ばれる。ヘイダルババは山である。

ヘイダルババは山の名で、ガユシュ・ゴルシャグの邑に向き合い、名高いガラチャマンとシャンガルアヴァの間の川沿いにあるわたしの揺籃の記憶のなか

に位置を占めている。

本作のなかのヘイダルババは、邑に常に君臨する悠久の長である。歴史の眼として、人々の営みを証し記録する。そして詩人の忍びねを大空に投影し、すべての地平へ送り届けることができる。

〈第2篇〉

ヘイダルババ 山鶉は飛び
茂みのなかから野兎は跳ねて逃げ
庭や小庭に花咲き乱れる
わたしたちを憶えてくれるなら
塞いだ心を喜びで満たしておくれ

〈第3篇〉

祝日の風が東屋^{あずまや}を打つ
ノヴルズの薔薇、雪の花が開く
白雲があなたの外衣をひきしめる
わたしたちを心に留めてほしい
わたしたちの憂いよ、高く積みあがれ、山となれ

063

【作者注解】「ノヴルズの薔薇、雪の花」とは、早春に雪の下から、またときには岩間から顔を出す美しい二種類の花である。前者は莖色で、はにかみやの花嫁のような姿をしている。後者は白く、姿は陽気な、恋する者のようだ。

【訳者注解】本作中にしばしば言及される「ノヴルズ」はペルシア語の「ノウルーズ (nowrūz)」。

春分にあたるイラン太陽暦の元旦。年越しは太陽が春分点を通過するその時間を含む日が春分日とされるが、これは年によって不規則で3月20日から22日頃の間に移動する。この日を暦法上の新年としているのはイランだけで、アゼルバイジャンや旧ソヴィエト中央アジア諸国でもこの日を祝う習慣のある国は少なくないが、これらの国の暦法は西欧諸国と同じカレンダーを採択している。

〈第4篇〉

ヘイダルババ 願わくはあなたの背を陽の光が暖め
あなたの顔は^{かんばせ}笑み、あなたの湧水が哭き
あなたの児たちが薔薇を束ねるように
風来たれば、ここへ届くよう、託してほしい
わたしの眠れる運が目覚めるかもしれない

〈第5篇〉

ヘイダルババ あなたの顔が清くあるように
四方に泉が、庭園があるように
わたしたちは逝っても、あなたはなお長い命に恵まれるように
天の意思、運命と死がこの世のすべて
この世には、亡き子を悼む親、親亡きみなしごたち

064

〈第6篇〉

ヘイダルババ わたしはあなたから道に迷っていた
人生のときは過ぎ、戻ることは叶わない——わたしは遅れをとった
美しいものもいかに果てたか知らなかった
知らなかった——迷い道、遠回り道があまたあるとは
喪失が、離別が、死があるとは

〈第7篇〉

ヘイダルババ 勇者は恩義に篤実だ
悔恨は流れる人生の時を横切り、絶えることはない
卑怯なものは人生を全うすることを得ず
わたしたちも、アッラーにかけて、あなたがたを忘れまい
相まみえることがもはや叶わぬとあれば、わたしたちをお赦しあれ

〈第8篇〉

ヘイダルババ ミル・アジュダル 呼び声をあげる
甲高い声が邑にこだまする
アシュグ・リュスタム サズを奏でる
覚えているだろう、わたしは速い律動にのっていた
鳥のように翼をひろげ飛んでいた

【作者注解】 ミル・アジュダルは名の知られた「チャヴシュ」であり、アシュグ・リュスタムは弾き語りで知られた詩人であった。

【訳者注解】 チャヴシュ (çavuş、チョヴシュ çovuş とも) とは、カルバラー参詣者の旅馬車を率いる隊長で、先頭に立って宗教的な詩篇を高らかに唱える。[Farhang-e jāme']

〈第9篇〉

シャンガルアヴァの「アシュグの林檎」
時々訪ねては、お泊まりしたものだ
石を投げ、林檎 マルメロの実を落とす
甘い眠りのような記憶
わたしの魂に、わたしのすべてに働きかける

【作者注解】

- 1) シャンガルアヴァ (ベルシア語表記はシャンガル・アーバード) は、美しい庭が数々あることで知られる山の邑。
- 2) 「アシュグの林檎」とは、みずみずしい林檎の種類で、半分が赤、もう半分が黄色をしていた。そのためアシュグの林檎と名付けられている。

【訳者注解】 アシュグ (Aşiq) とは吟唱詩人のことで、直訳的には「恋するもの」の意。テュルク系諸族の伝承では、吟唱詩人とは、生まれたときに神が夢にみせた恋人 (マシュグ Maşuq) の姿を一生追い求めて詩を詠むとされている。そのため赤・黄の二色で半々であることを、アシュグとマシュグの対にみたてている。

〈第10篇〉

ヘイダルババ グル・ギョリュの鷺鳥たち
峠をわたる寒風が奏でる音
麦畑と邑——秋と春の景色
眼のなかのスクリーン
独り座って心の裡で見入っている

【作者注解】 グル・ギョリュ Quru gölü とは「乾いた湖」という意味。大きな池のような湖で、シブリ峠の傍、テヘランへ通じる街道沿いにある。鷺鳥や野生の水鳥が集まり、しばしば素晴らしい風景を目にすることができる。夏になると水量が減る。「乾いた湖」の名で呼ばれるのはそのためである。

〈第11篇〉

ヘイダルババ ガラチャマンの街道
参詣者を率いるチョヴシュらの声は飛び交う
カルバラーへ向かう険しい路
打つがよい——餓えたこの無道者どもの眼を
文明の弄する誑かしの言葉を

【訳者注解】 ガラチャマンはタブリーズからテヘランへ至る街道に接する地名。タブリーズからホシュゲナーブを目指すときは、ここで街道を逸れて丘陵と畑のなかの狭い農道を進んでゆく。チョヴシュは第8篇「訳者注解」参照。

〈第12篇〉

ヘイダルババ ^{シェイタン}悪魔はわたしたちを迷わせていた
心から愛を萎えさせていた
破滅の日の定めを記していた
人々に敵意を煽り
人の和を血塗られたものにした

〈第13篇〉

涙のなかで眺めるなら 血は流れない
人倫に篤実なものは 腰に帯刀しない
かなしいかな、眼の曇ったものは手にしたもの放さない
わたしたちの楽園は地獄にならんとし
わたしたちのズイルヒッジャはマハッラムにならんとする

【訳者注解】 アゼルバイジャン語のズイルヒッジャ (zilhiccə) とマハッラム (məhərrəm) はそれぞれイスラーム太陰暦の dhū-l-hijja 月と muharram 月。ズイルヒッジャはムスリムの五行のひとつとしてのマッカ巡礼を為し遂げる宗教的至福を象徴する月。それに対してマハッラムはシーア派の信徒が、カルバラーでのホセイーン殉教に因む種々の哀悼行事を執り行い、信仰上の悲劇を追体験する月。

〈第14篇〉

秋の風が葉を吹き落す
雲は山から下りて邑にかかる
シェイヒュルイスラムは美しい声を発する
憂いをおびた声が心に語りかけた
樹もアッラーに頭を下げた

067

【作者注解】「シェイヒュルイスラム」は、邑にいた説教師（ペルシア語 vāez va rūhānī）であり、知識人（ペルシア語 rowshanfekrī）として尊敬を集めた人物である。若い時分には彼は良い声だった。

〈第15篇〉

ダシュルブラグの泉が石と砂で埋まらぬことを
庭園が黄みを帯び、色を失わぬことを
過ぎゆく騎手が水なくして渴かぬことを
泉よ、尽きぬ流れに幸いあれ
憂いをおびた眼で地平を眺めよ

【作者注解】 ダシュルブラグとは、石の泉という意味。

〈第16篇〉

ヘイダルババ ^{やまなみ} 山脈の狭間の溪谷

山鶉は啼き、山の懷には雛鳥

白、灰色、黒の仔羊たち

また山や溪谷沿いに行きたい

「羊の群を呼びもどせ、牧童よ」と歌いたい

【作者注解】「羊の群を呼びもどせ、牧童よ」とは当地の民謡の一節。

〈第17篇〉

ヘイダルババ スルイェルの野原で

温水進る草原の泉の湧口で

水面にたゆたうブラグオトゥ

美しい渡り鳥はここを過ぎてゆく

密やかに集い水を飲む

【作者注解】スルイェルは地名。ブラグオトゥ（Bulaq otu）とは泉の畔に生育する香草で、水にたゆたっている。

【訳者注解】ブラグオトゥはベルシア語の ābtare、いわゆるクレソンのこと。

〈第18篇〉

麦の穂を刈り取る鎌

巻き毛を櫛で梳くかのよう

狩人たちは鶉の気配を窺う

刈入れ人たちはアイランを飲み

しばしの微睡ののち、また立ち上がっては刈り続ける

〈第19篇〉

ヘイダルババ 邑のひと日が暮れてゆく
子供らは夕食を摂って、眠りにつく
雲から月があらわれ、目くばせする
あなたも子らにきかせてほしい、わたしたちの物語から
悲しみ、愁いに満ちたわたしたちの物語から

【作者注解】 邑の子供たちは夕方になると夕食をいただき、寢床へゆく。そこで年長者たちに物語やお話をきかせてくれとせがみ、子守歌がわりに楽しい昔話を聞きながら眠りについたものである。

〈第20篇〉

夜、お婆さんはお伽噺をきかせてくれる
風がわき立って、戸口と煙突に吹きつける
狼は山羊のシャンギュルを喰う
わたしもひととき、子供に戻りたい
いまひとたび一輪の花とひらいてから色褪せたい

069

【作者注解】 冬の夜に風と吹雪が傲然と、戸口、梁といわずに家中を叩くとき、老女たちは子供に狼と仔山羊のお話を語ってくれた。子供たちは、どうやって狼が来たか、シャンギュルとマンガユルをどのように攫っていったか、惹きつけられていた。

【訳者注解】 シャンギュル、マンガユルと狼の話はアゼルバイジャンの民話。様々なヴァリエーションはあるが、留守中に家に残った仔山羊を狼に攫われた母山羊が、狼に闘いを挑んで鋭く研いだ角で退治し、仔山羊を救う（あるいは喰われた仔山羊の敵討ちをする）という話。

〈第21篇〉

伯母さんが作る蜂蜜のバッラをいただいた
立ち上がって、裾の長い外套を羽織った
庭でティリング調の小唄を口ずさんだ
おお、気儘に遊んだあの日々
木馬に跨り騎手をきどった日々

【作者注解】

1) バッラとはペルシア語ではログメイェ・ガーズィーという。ナーンに蜂蜜やバターなどを塗って具と一緒にしたもので、子供たちはそれを手に取って夢中でかじりついた。

2) テイリングとは、ペルシア語も同じようだが、決まったリズムに乗せた民謡である。

〈 第22篇 〉

ハチュ伯母さんは川岸で着物を洗った

ママド・サデウクは藁と土で屋根を直した

山も、石も、壁も怖いものなし

どこでも、わたしたち子供は跳ねて、突っ切り

おおアッラー、なんと楽しく、憂いなく、暮らしていたか

【作者注解】 ハチュはハージェル（訳者補注 旧約聖書のハガルに相当する女性の名前）の縮めた呼び方。人名。

070

〈 第23篇 〉

シェイヒュルイスラムは祈禱文を朗読していた

マシャド・ラヒムは裾の長い外套を羽織っていた

マシャ・ハジャリはボズバシュを食していた

法要の膳も婚礼も わたしたちには楽しい

どちらであっても同じこと——なんなりとあるがまま

【作者注解】 今は亡きマシュハディー・ラヒーム（マシャド・ラヒム）とマシュハディー・ハージュアリー（マシャ・ハジャリ）は邑を象徴するような長老であった。ラッバーデ（訳者補注 外套。現在ではシーア派の聖職者が羽織っていることが多い）を羽織ったマシュハディー・ラヒームは物知りで、彼の知恵はなお活きている。マシュハディー・ハージュアリーは頑健でよく食べる人物だったが、人々のために大いに尽くした。

【訳者注解】 ボズバシュは伝統的な料理で、ペルシア語のアーベゲーシュトまたはディーズィー。アゼルバイジャン語でビティともいう。脂身のついた仔羊肉とヒヨコ豆、タマネギ、トマト、ジャガイモなどで作る煮込み料理。煮込んだ具と汁をわけて、パンと合わせながらきまった順序で食する。

〈第24篇〉

マリク・ニヤズはヴァランデルの獵銃を肩に
馬を駆り、右に左にと獲物を狙い
鷹のように嶺に降り立った
娘たちはなぞえにむけて窓を開き
窓から窓へと美しい眺め

【作者注解】マリク・ニヤズ・ハーン（マリク・ニヤズ）は地元の名士のひとりで、鉄砲撃ちと乗馬に長けた人物であった。

【訳者注解】ヴァランデルはガージャール朝時代に使われた獵銃。製造工場の名に由来する。[Mashrūtehī 1392: 96]

〈第25篇〉

ヘイダルババ 邑では婚礼
娘たちはヘンナと灯明を客人に売る
花婿が林檎を投げる
娘たちを眼で追った
アシュグの奏でる楽の音に合わせ、わたしが詠んだ詩

【作者注解】

1) 婚礼のしきたりのひとつで、光と喜びの縁起物としてランプの芯とヘンナの椀を盆に乗せ、娘たちが持って回る。招かれた客は、ランプの芯と少量のヘンナを一人ずつ取って、引き換えに各自相応の範囲で金を置く。集めた金は「化粧代」との名目で、花嫁の着付け師・介添人に贈られる。

2) (本篇のもうひとつの婚礼のしきたりは) 花嫁を馬に乗せて嫁ぎ先へ導き、予め刃物で切れ目をいれておいた林檎の実を、家に着いた花嫁の足元に屋根から花婿が渾身の力を込めて投げつける。林檎は地面にあたって碎ける。林檎は満腹（飽食、飽き）の象徴なので、（それを碎いて）取り除き、ふたりに終生飽きがこないように祈念している。

〈第26篇〉

ヘイダルババ 泉の畔の薄荷草
菜園の胡瓜、西瓜
行商人たちの飴、ガム
今も口に残る甘い匂い
失われた日々から戻る記憶

【作者注解】 ヤルプズ（訳では薄荷草）は、ペルシア語の「プーネ」で、春の使いそのものである。香気を放ち、健康にも良い草のひとつで、情趣を解する人の味覚には、思い出深いものがある。特に湧き水の豊かな土地で、ナーンと新鮮な邑のチーズとともに食するのは格別である。

〈第27篇〉

ノヴルズの祭り、夜の鳥が啼いていた
嫁入りを待つ娘が新郎のために靴下を編んでいた
皆がシャールを煙突から差し込んでいた
ああシャールを吊るすのは素敵なしきたり
花婿のシャールに結わえた新年の贈り物

【作者注解】 田舎の家屋では、空気を入れ換え、竈の煙を外へ逃がすための孔がある。ここは、同時に別な役割も果たしている。ひとつは、私の別の作品「田舎の婚約者たち」に紹介した、許嫁同士の密会の場である。もうひとつには、ノヴルズの祭りの夜に、シャール（ショールの一種）をぶらさげるしきたりがある。チャハールシャンベ・スーリーの夜以後、皆が屋根に上り、誰だか分からないように自分の色のシャールを吊り下げる。つまりお年玉が欲しいという意味である。家の主は、どのシャールが誰のものかを察して、相応な贈り物をお年玉としてシャールの端に結わえたものだ。当時のお年玉に多かったのは、花柄の毛糸の靴下、絹のハンカチ、子供用の口琴、美しい雛鳥、色付けした卵、ナッツと菓子であった。この習慣は子供たちを喜ばせ、特に貧しい子供たちの気持ちを引き立てるとともに、ノヴルズの日々のなかでの晴れがましく、素晴らしい行事のひとつであった。

〈第28篇〉

シャルを泣いて欲しがった
シャルを一枚手にいれてすぐ腰に結んだ
グラムの家の平屋根に走ってシャルを下げた
ファティマ伯母さんが靴下をシャルに結んでくれて
わたしの亡き祖母ハン・ナナを偲んで泣いた

【作者注解】あの年に、わたしの祖母ハーノム・ナンネ（ハン・ナナ）が亡くなったので、わたしたちもノウルーズの行事は慎むべきであった。しかしわたしはまだ子供で意固地になり、シャルを手にとって、遊び仲間であった従兄（母方の伯母の息子）ゴラーム（グラム）の家の屋根に駆けて行った。今は亡きファティマ（ファティマ）伯母さんは、シャルがわたしの物と察して、柄物の靴下を結び付けてくれた。そしてわたしの亡き祖母ハーノム・ナンネが、わたしたちを後に残して逝去したことを思い落涙していた。鄙の婦人のあのときの神々しい表情は、わたしの裡に忘れることのできない一幅の絵として残っている。

〈第29篇〉

ヘイダルババ ミルザマドの小庭
甘酸っぱい小庭の梅の実
壁龕に収めた新妻たちの化粧道具
眼のなかにいつも収めてある
順に連なる記憶は天幕を立ち上げる

【作者注解】「ミルザマド」とはミールゼ・モハンマドを縮めたものだ。彼は勤勉で誇り高い、わたしの親戚で、ヘイダルババの麓に菜園を持っていた。わたしと友達とに、菜園のなかで自由にしてよいと許可をくれた。

〈第30篇〉

新年がくる、赤い土を捏ね
絵柄をつけて、部屋を飾る
壁龕にいっぱいの化粧道具
新妻が指先をヘンナで飾り
母も、姑さんも上機嫌

〈第31篇〉

バクーからの来訪者が届ける言伝、手紙

牝牛の濃い乳^{※1}

年越しの水曜日、胡桃と豆

娘たちは澄んだ水の流れを跳びこえ

鏡のように幸運を映しだせと念じている

【作者注解】 アーザルバーイジャーンでは、チャハールシャンベ・スーリー（チャルシャンベ^{※2}）の朝、流れる水の上を飛び越えて、次のようなまじないを唱える。

「わたしの運気は吉とでる アッラーの祝福あれ！

白い両手に赤いヘンナ アッラーの祝福あれ！

跳べ、チャルシャンベ！ 開運のチャルシャンベ！」

テヘランではチャハールシャンベ・スーリーの夜に火を熾して上を飛び越え、こう唱える。「わたしの黄色はあなたから、あなたの赤はわたしから」

【訳者注解】

※1 原語は bulama 仔を産んで直ぐ分泌される家畜の乳。

※2 チャハールシャンベ・スーリーはノウルズ前の最後の水曜日の年越しの風習のひとつ。テヘランで唱えられる上の句は、災厄と悲しみの象徴である「黄色」を祓い、幸運と平安の象徴である「赤色」を呼び寄せるおまじないである。

〈第32篇〉

赤や青で卵に絵付けして

ぶつけ合って、割れた殻を剥き

いつしか遊び疲れた

アリが緑のアシュグをくれた

イルザはノウルズの薔薇を摘んでくれた

【訳者注解】 ここで言うアシュグ（aşıq）とは羊の膝関節の骨でつくった玩具。しばしば賭博にも使われた。

〈第 33 篇〉

ノヴルズアリは脱穀機^{ヴァル}を驢馬に牽かせる
時々驢馬を止めて、藁を掻き集める
山から牧羊犬が吠える
そのとき驢馬はびたりと足を止め
山を見つめて、耳をそばだてていた

【作者注解】 ここでいう「ヴァル」とは脱穀機のこと、タブリーズではジャルジャルと言われる。牛、馬、あるいは驢馬に繋いで脱穀を行う。

【訳者注解】 イランの古くからの脱穀の情景である。束ねた小麦を脱穀場に敷いて、その中心に立てた杭に驢馬を繋ぐ。上に作業者が乗った木製の脱穀機（アゼルバイジャン語 vol または carcar/ ペルシア語 kharman-kūbī）を、杭を周るように驢馬に牽かせて、麦の実を藁から切り離すという方法である。

〈第 34 篇〉

夕暮れに家畜番たちが来る
仔驢馬たちを引き寄せて、縄に繋ぐ
群は往き、邑にたどり着く
裸の驢馬にまたがって、わたしたちは突っ走っていた
やがて叱られると、我が身を守ろうと抗弁した

【作者注解】 子供たちの気晴らしのひとつは、夕暮れ時に家畜の群が野から戻ってくると、仔驢馬たちを捕まえて傍らに引き寄せる。仔驢馬は群に遅れるまいと足を速めるので、子供たちは駿馬の騎手を気取り、チャヴシュたちを真似て大声をあげたものだ。これはしばしば飼主の抗議に遭って、子供たちは裁きを押し戻して、自らの身の証を立てねばならなかった。

〈第 35 篇〉

春の夜 川に水が流れる
岩、石は踏み鳴らして急流を渡る
暗闇のなかに狼の眼がぎらりと光る
犬たちは狼の姿を見分けて唸り
狼は起き上がり、峠の向こうへ去った

〈 第 36 篇 〉

冬の夜、馬屋の広間で
椅子に座ったもの、寝転ぶもの
暖炉に薪が燃え
干し桃、胡桃、砂棗
笑い、語らう声が邑を覆う

〈 第 37 篇 〉

従兄シュジャのバクー土産
屋根の上に組み立てたサマーヴァルと弾む話
あの背格好まで憶えている
若くして逝き、婚礼は供養になり
ナナ・グズの運命の鏡は曇ってしまった

【作者注解】従兄ショジャー（シュジャ）は勇敢で風采の良い青年だった。バクーへの旅から土産をいっぱい抱えて帰り、綺麗な許婚をみつけた。アコーディオンを奏でれば巧かった。昼過ぎに屋根のうえに陣取って、大きなサマーヴァルで湯を沸かし、若者たちと談笑したものだった。残念なことに、彼の運命は哀れなシネマの一幅の画面と化してしまった。成婚を待たずにチフスで亡くなったのだ。許婚は、一文の値打ちもない、ろくでなしの求婚者たちのために残された。

【訳者注解】サマーヴァルは伝統的な金属製の湯沸かし、給茶の器具。日本ではロシア語表記 самовар に近い「サモワール」の呼称でより知られる。

〈 第 38 篇 〉

ヘイダルババ ナナ・グズの眼
ラフシャンダの甘い、甘い言葉
わたしが「トルコ語」で詠うのは、二人にわかってほしいから
人は往くが、その名は残る
甘味も苦味も食した口に後味は残る

【作者注解】「ナナ・グズとラフシャンダ」はともに親戚の娘で、子供の頃、一緒に遊んでいた。

【訳者注解】 イランで「トルコ語」というのは一般的にアゼルバイジャン語のことを指し、言語学的な厳密性を期する場合などを除くと「アゼルバイジャン語」という表記はあまり使われない。トルコ共和国のトルコ語を特に指す場合は「イスタンブール」に由来する「エスタンブーリー」と言って区別することが多い。

〈第39篇〉

早春の陽射し、山の日向

雪玉を迎え撃って遊ぶ子供たち

えんぴ
円匙にのって斜面を滑る若者ら

わたしもそこここに心を馳せる

山鶉のように雪のなかを転がっては起きる

【作者注解】 祭の日には、子供たちは寒さに負けずに雪合戦が好きだった。若者たちは陽のあたる山の斜面を、雪かき用のシャベルで滑っていた。これは田舎風のスキー遊びのようなものだった。まるで酔って飛ぶようで、特別なこつが要るが、座って動けるので、ヨーロッパのスキー遊びよりも楽であった。

077

〈第40篇〉

お婆さんは織物を広げる

太陽が雲のなかで糸紡ぎを回せば虹がかかる

狼は老いて歯が抜けた

群は曲道を上っていった

乳桶を満たして、運んでいった

【作者注解】 テシュとは、肉叩きの槌に形が似た紡錘の一種で、小さな鉤がついている。田舎の女たちは白い羊毛を膝の上に置いて、テシュで糸紡ぎの仕事をしていた。この一篇では、太陽が雲の中に巻かれた様子をテシュに喩えてみた。

【訳者注解】 アゼルバイジャンのフォークロアでは、薄日の空に雨が降って虹がかかるときは、狼が子を産んでいるところか、あるいは老いて歯が抜けたときで、無害な状態だと言われている。[Mashrūtechī 1392: 112] 詩のなかに空に虹がかかったという直接の描写はないが、ドイツ語版のように Wenn der Regenbogen am Himmel stand... / und wenn der alte Wolf grimming in den Felsen verschwand と翻訳上「虹」に関する対句を補う例があり、本稿もそれに倣った。[Mehragani 1993:37]

〈第41篇〉

ハッジャ・スルタン伯母さんは歯ざしりして
従兄のモッラー・バグルはおかんむり
竈には火が入り、家は煙たい匂いでいっぱいだ
竈の中にはパン焼きの篋^{へら}、上には薬缶でお湯が沸く
サジのなかで煎る麦粒がはじけていた

【作者注解】冬になれば、朝早くから伯母は竈に火を入れて、家の大掃除を済ませてから、また炬燵を整えていた。はじめに箒の柄で何もかも家の外に出さなければならず、これだけのことは怠け者のわたしたちには、何の得にもならないことだった。特に伯母さんの夫は年寄りでもあり、炬燵の外へ追い出され、居場所を変えるのはつらい。できる限り愚図愚図してみせていた。伯母を畏れて態度が横着になると、伯母自身も怒りの激しさに歯ざしりする。そんなふたりの間の応酬はおもしろかった。

【訳者注解】サジとは竈の上、あるいは直火の上に置いて、穀物を炒るための盾のような形状の調理器具。[Mashrūtechī 1392: 113]

078

〈第42篇〉

菜園の実りを持ち帰り
家で木皿を、盆をいっぱいにした
南瓜を竈で料理した
実をたいらげ、種を齧って
今にも破裂しそうに満腹していた

〈第43篇〉

ヴァルズィガンから梨を売りに来る
邑に湧き上がる子供らの声
その声を耳にして梨売りの到来に気づく
みな小躍りして歓声をあげた
麦を渡して梨を貰った

【作者注解】 ヴァルズィガンは、当時豊富に果物が獲れる邑の名前で、他の邑へ売
るための果物が運ばれてきた。そこにはヴァルズィガンから来る梨売りの声と、
子供たちの喜びの歌声があった。特に取引は物々交換だった。現金は要らず、皆
一握りの大麦、小麦で梨を買うことができた。

〈 第 44 篇 〉

夜、ミルザ・タギと川に行った
川の流れのなかに沈められた月をみた
とつぜん向うの岸に光が閃いた
ああ、あれは狼だ——わたしたちは逃げ帰った
わたしたちは何時川堤を越えていたのやら

【作者注解】 ミールザー・タギー・バグルザーデ（ミルザ・タギ）はわたしの従兄だ。
ある冬の夜、連れ立って川へ行って、水面に月を眺めていた。月はまるで手足を
ばたつかせて溺れる人のようで、わたしには詩的な感興が花開いていた。そのと
き、向こう岸の麓にある菜園の暗がりに、ふたつの焰が燃えているのが突如見えた。
従兄が悲鳴を上げた「狼がいるぞ」。わたしの夢想は破られ、ふたりで逃げ出した。
道は上り坂で、恐怖に力の抜けた脚をやっとの思いで引き摺り、震える身体で顔
面蒼白になって家に帰りついた。あの夜、炬燵布団にはいっても、なおも震えが
止まらなかった。

079

〈 第 45 篇 〉

ヘイダルババ 樹々は高々と伸びた
けれど悲しいかな、若者は老いた
脂ののった仔羊は餓えに痩せ衰えた
蔭が還り、陽は沈み、闇が広がった
狼が夜闇に眼を見張った

【作者注解】 「脂ののった仔羊」の原語は toxlu（現在のアゼルバイジャン共和国で
の表記は toğlu）。特に生後 1 年の仔羊を指している。

〈第46篇〉

わたしは聞いた——アッラーの燈火は点っていると
マスジッドの泉水は豊かに湧いていると
邑の家が、子供たちが平穏であると
マンスル・ハンの手と腕に永き命を
いずこへありともアッラーが彼の友たらんことを

【作者注解】 マンスール・ハーン（マンスル・ハン）は今、テヘランに住んでいるが、故郷の邑に対して義理堅く、何年か前に十分な時間と財産があって、マスジッドのほとんど枯渇した井戸と、マスジッドそのものを修繕した人だ。その善行によって名が残っている。

〈第47篇〉

ヘイダルババ モッラー・イブラヒムはいたのか、いなかったのか
学舎は開いていて、子供たちは授業を受けていた——ちがうのか
収穫で休校だった——ちがうのか
アーホンドによろしくと、伝えてくれ
恭しく、偽りない気持ちを込めて

【作者注解】 モッラー・エブラーヒーム（モッラー・イブラヒム）はわたしの師である。実に博学で、わたしの覚えているところでは、45年にわたって私塾を運営する教師であり、また邑だけでなく、周辺のすべての人たちのあらゆる相談に応じていた。この一円の地主や有力者も皆、彼の教えを受けて、彼の恩を受けていたが、彼は誰に援助を求めることもなく、今もって完全に自由、自立のなかで生きている。時に自分の小さな畠の作業に、また時にはいつもどおりの無報酬の教職に今も勤しんでいる。

【訳者注解】 アーホンド（ペルシア語 ākhond）は、イスラーム諸学に通じた宗教指導者、聖職者を指す。

〈第48篇〉

ハッジャ・スルタン伯母さんはタブリーズへ行った
けれどタブリーズには、わたしたちを訪ねる処はない
さあ立とう、子供たち——行こう、わたしたちの家へ
この家の主は逝去し、わたしたちの炉辺は四散した
うちの羊は乳が満ちれば、よその厩舎で乳を搾り取られる

【作者注解】わたしたちの一家がタブリーズにいたときは、伯母は何年かに一度は
邑からタブリーズを訪ねてきたものだ。父亡きあと、わたしたちの家族はテヘラ
ンへ移り住んだが、伯母はタブリーズへ行っは、父の子たちの不在をいたく嘆
いているといつも聞いていた。この一篇は、私たちへのそのような想いに捧げる
ものである。

〈第49篇〉

ヘイダルババ 世界は偽りの世
スレイマンからヌフの代から残った世界
そこに生まれた子を苦悩へ追い遣る世界
与えたものは誰もがことごとく奪い去られ
アフラトゥンという虚しい名だけが残っていた

o81

【訳者注解】スレイマン、ヌフ、アフラトゥンは人名で、それぞれソロモン、ノア、
そしてプラトンのアゼルバイジャン語表記。

〈第50篇〉

ヘイダルババ 同郷の親しい友たちは逝ってしまった
ひとり、またひとりと、わたしを曠野に置いて 逝ってしまった
わたしの泉も、わたしの灯りも 消えてしまった
荒廃の大地に陽は逝き、夜になった
わたしの世界はシャムの廢墟と化した

【訳者注解】シャムとは歴史的シリア地方のこと。「シャムの廢墟」とは、カルバラー
の戦いでイマーム・ホセインに従って敗北を喫した者たちが、ダマスカスへ俘虜

として運ばれ、ウマイヤ朝カリフ、 ヤズィード・ビン・ムアーウィーアの手の人たちから辱めを受けたという、貴い身にふさわしからぬ思むべき「場」の暗喩と考えられる。

〈第51篇〉

従兄と夜グプチャグへ

月の出に馬たちは遊び

山を駆け上がり、駆け抜けて

マシュマム・ハンは蒼い馬を躍らせ

弾を充填した猟銃、銃声が轟いた

【作者注解】「グプチャグ」とは山間の邑やまあいのひとつである。子供の頃一度、従兄のマフムード・ヌーラーザルと一緒に招かれて行き、馬で数日間辺りを周遊して過ごした。「マシュマム・ハン」はシャガーギー人の現役大佐で、わたしたちを客に迎えてくれた人物である。

【訳者注解】シャガーギー (Shaqāqī) とは、イランで現在の東アゼルバイジャン州ミヤーネとサラーブを中心に定住したクルド系シーア派ムスリムの部族。

〈第52篇〉

ヘイダルババ、ガラキョリュの谷は

ホシュゲナーブの境の道

山鶉うずらの雛が落ち

郷のうえへとここから空へ発ち

わたしたちも郷の言葉はここに始まる

【作者注解】「ガラキョリュ」とは「黒い茂み」という意味で、ヘイダルババの裾野にある溪谷の名である。ガユシュ・ゴルシャグ（ペルシア語表記はガーイエシュ・ゴルシャグ）の邑と我らの父祖の郷里であるホシュゲナーブを繋いでいる。

〈第53篇〉

ホシュゲナーブを日々慟哭の裡に投じたのは誰か

セイイェドたちのうちで、落命したのは誰——生き延びたのは誰

アミル・ガファルの屋敷は誰の手に渡ったのか
泉水はまた還り、池を満たすのか
それとも枯れたきり、菜園は消失するのか

〈第54篇〉

アミル・ガファルはセイイエドたちの宝冠
シャーたちを狩りで導くもの
高潔なものには甘美だが、卑劣なものには苦く
虐げられたものたちの正義のために身震いし
非道なものたちを刀剣のように斬り捨てた

【作者注解】 アーガー・ミール・ガッファール（アミル・ガファル）はセイイエドのひとり、ホシュゲナーブの名士である。ハージー・ミール・シャリーフ（亡きモストフィー・オルママーレク^{*1}の友）の亡きあと、タブリーズとテヘランで令名高かった人物である。見目好いセイイエドで、雄弁、鷹揚で勇敢だった。俊敏で必要とあれば正に切れの良い刃物のようであるが、機知と集いの場を盛り上げることにかけては、絶妙の技芸の域に達している。今様に言えば、教訓的コメディの「ピエス^{*2}」を書いては、その登場人物を自演できる人である。彼が催す集いに出席するものたちは、笑ったあまりに失神しそうになったものであった。たとえばナーセロッディーン・シャーが暗殺されたのち、タブリーズから動こうとした後継のモザッファロッディーン・シャー^{*3}は、意気消沈してとめどもなく落涙していた。廷臣たちはシャーの気分を変えようと、ミール・ガッファールに助けを求めた。セイイエドはシャーの馬の手綱を手にとって戯けを始めたのが功を奏し、シャーは笑いに突き動かされて心地悪くなり、ついに悲鳴をあげた。「来てくれ、誰ぞこのセイイエドの手から余を救い出してくれ」

自らはいくばくかの土地をホシュゲナーブに持って暮らしていた。富める人々から獲ったものを、貧しい人々に分け与えていた。あの頃のホシュゲナーブの臣人たちも、彼の屋敷ではショールや羊毛の上着を身に着けていた。

【訳者注解】

※1 モストフィー・オルママーレクはガージャール朝時代の名門の出身で、ガージャール朝末期からパフラヴィー朝最初期にかけて首相職を務めた政治家。

※2 フランス語 pièce。戯曲のこと。

※3 ナーセロッディーン・シャー（在位 1848-96）、ムザッファロッディーン・シャー（在位 1896-1907）はともにイラン・ガージャール朝の国王。イラン領アゼルバイジャンは、北西の辺境でロシアに接する地勢から、ガージャール朝時代にその秩序と安全はイラン全体の安定にとって切実な問題となった。そのため中心都市タブリーズは、王位継承者所在地としてその管轄下に置かれ、あるいは時期によっては州や準州より格上の「藩国」と位置づけられるなど、重要視されていた[八

尾師 1998:130-131]。ムザッファロッディーン・シャーはタブリーズ生まれで、父王の治世の皇太子時代にはイラン領アゼルバイジャンの知事であった。

〈 第 55 篇 〉

ミル・ムスタファは背の高い親仁
がっしりして、髭を蓄えたトルストイ伯父さん
哀悼の集いも婚礼のように変える伯父さん
ホシュゲナーブの誇りと教養
マスジドで、集いの席での傑物

【作者注解】 ミール・モスタファー・ダーイー（ミル・ムスタファ）は父の母方の伯父である。セイイェドで体格ががっしりして背も高く、立派な髭をたくわえ、顔立ちはロシアの名高い作家で哲学者のトルストイに似ていた。また精神的にはフェルドゥースイーのようであった。英雄叙事詩と英雄伝をいっぱい誦んじて語ることができ、巧みに時宜に合った詩を詠んだものだ。いつもの会話は真面目な表情で、語り口は独特な喩えに満ちており、聞き手の笑いを取っていた。たとえば、老女の長い鼻を人々の眼に狙い定めた二連式砲身の獵銃に喩えてみせたことがあった。霊能の諸学にも通じていて、癲癇を無償で治していた。街では知られはしなかったが、邑では名物男だった。

〈 第 56 篇 〉

マジデュッサダトの笑みは花開く園のよう
雲のかかる山に雷鳴轟くようなその言葉は
バターのように柔らかな口どけ
誰に恥じることなく、洞察は深く
緑の眼は燈火のように燃えていた

【作者注解】 マジドゥッサダー（マジデュッサダト）は亡きミール・アターッラーのこと。勇敢で見た目よく、背が高く、碧い眼は輝いていた。亡きガッファール氏のように、とても明敏で鋭い人物であると同時に、冗談を飛ばし、集いがあれば座を盛り上げる人であった。音楽を愛し、自分の子供たちに音楽を体得させようと奨励していた。

〈第 57 篇〉

父は食盆を鷹揚に振舞った

困窮する人々の手をとるのが習いだった

残された最後の美德だった

あとに、わたしたちの家門の運気は逆に回り

愛の灯火は消えてしまった

【作者注解】わたしの亡き父ハージー・ミールアーガー・ホシュゲナービーは、セイイェドで、初対面でも生まれの尊さと気品とが現れる、良い顔立ちをしていた。中背で、身体はまず均整がとれて、威厳があった。眼光鋭く、表現は雄弁で、とても鷹揚であった。家族は 30 人、40 人といったが、その食卓は町衆であれ、邑人であれ、誰にでも開かれていた。自ら詩を書くことはなかったが、詩と音楽をとっても愛好し、あらゆる種類の芸術の奨励者であった。書道を学んで字は達筆だった。太字書体は亡きホシュネヴィースパーシー、細字書体は亡きアミール・ネザーム・ガッルスイーに師事している。ふつうは非常に我慢強く、温厚であったが、稀に怒ることもあった。怒ると毛が逆立ち、眼が血走って赤くなったものだ。

父は法律、法廷のいずれの業務にも精通していた。係争があらうと、可能な限りは、和解によって平穩に解決させていた。依頼人が裕福であらうと、理非を弁えない主張には、厳しい姿勢で仕事を断った。逆に資金のない依頼人なら、無償で仕事を引き受け、その家賃まで費用は自分が持って取り決めてやっていた。虐げられた人々の権利を公正に守ることに一生を捧げた。誰とも友好的だったが、心根はきわめて敬虔で慎み深かった。父の言葉は時のウラマーたちにも影響力があった。ホシュゲナーブのセイイェドたちの間で、信仰の深さで思い出すのは、ふたりである。ひとは亡きハージー・ミールアリー・ホシュゲナービーで、彼はタブリーズ街道に住んでおり、まさしく聖者だった。わたしの子供じみた詩集などにその名を挙げるのは、彼の名誉を損ねるだろう。そして二番目がわたしの父だ。神よ、逝きしものすべてをお赦しあれ。父は何度か神のお呼びあって「御稜威の夜」に世を去った。イラン太陽暦 1313 年のラムザーン 23 日の夜、夜明かしの礼拝を終え、朝のアザーンの二時間前、発作のために微笑みながら世を身罷った。その夜、わたしはホラーサーンの田舎にいた。夢にみた父は、月の球体のうえに立って動いていた。胸まで月光で覆われて、高笑いをするとその声とともに、姿が臉に焼き付いた。わたしが目覚めると、邑の老人が言った。「アッラーフ・アクバル。光は風を明るく灯した」。わたしは動揺して、占いにハーフェズの詩集を開いた。訝しいことに、この夜まではこの眼にとまることのなかったガザルが現れた。その対句の一と三がこのようなものだった。

別れの日、友の告別の夜がやってきた

卦を引けば、瑞星^{すいせい}は過ぎゆき、業は成った

心より地平へ光を送り

我らは太陽へ達し、埃は果てた

この二日後、父の訃報の電報が届いた。

【訳者注解】ここで言及されるハーフェズのガザルの全体的な文脈は、暗い冬が去り、春が訪れる喜びを謳うものである。終焉に至った時代と新たな時代を対置して未来への希望を詠むものとも解釈可能で、必ずしも人の逝去を詠んだものとはいえない。なお「心より地平へ光を……」と訳した対句の有無に、詩集の版によって異同がある。

〈第58篇〉

ミル・サレフは憤激に狂わんばかり

ミル・アズィズは「シャフセイ」の隊列の先頭にたち

ミル・マッマドは締めくくりに語りの妙演

思い出せば、迫真の語り草

過ぎて往き、今はその果てに消失した

【作者注解】

1) アーガー・ミール・サーレフ（ミル・サレフ）はとても見目好く、無邪気で心根の良い人物であった。彼の語りは熱気と感情が紙一重になって、気が変になったのではないかと人々に嗤われたものだ。

2) 亡きアーガー・ミール・アズィーズ（ミル・アズィズ）はしっかりして頑健な体つきで、「シャー・ホセイン（シャフセイ）」の隊列を組むと、いつでも音頭取りは彼だった。それは彼の声が良く、目立ちたがりであったからで、彼はあらゆる意味で適役と思われていた。

3) 今は亡きアーガー・ミール・モハンマド（ミル・マッマド）は、乗馬と射撃に長けていたアーガー・ミール・モフセンの息子だ。見えざる者たちが知る言葉を語るときは、アーガー・ミール・モハンマドはまるで調弦されたサズのように、徐々に熱を帯びて、口に泡を飛ばして始まる詩吟は圧巻だった。

【訳者注解】本篇はシーア派ムスリムにとって重要な、イマーム・ホセインのカルバラーでの殉教を哀悼するムハッラム十日前後の一連の宗教行事をうたったものである。「シャフセイ」とは、特にアゼルバイジャンで行われるもので、シャー・ホセインの縮約形。二列に対面に向き合った参列者たちはめいめいが片手を隣の者の背中に持っていき、哀悼の詩篇朗読に合わせて刀に見たてた棒をもう片手で上下に振る。これがホセインとヤズィードの戦闘の象徴である。YouTubeでも現在執り行われる動画を多数視聴可能である。

〈第 59 篇〉

ミル・アブドゥル、鏡のなかで眉墨を塗る
左右の頬を藍が濡らす
潜んで覗き見——門口、壁からのまなざし
めでたし、シャー・アッパースの魔鏡よ
めでたし、ホシュゲナーブの楽しい日々よ

【作者注解】

1) 亡きアーガー・ミール・アブドルハーレグ（ミル・アブドゥル）は伯母の夫であったが、若い時分には奇想天外なことで人を楽しませたものだ。なかでも、艶っぽい女たちを真似て、眉墨を塗り、チャードルを被って壁の裏側から様子を窺い、若者たちに目配せしていた。この話は、ホシュゲナーブの良き日々の楽しい思い出として、心に残っている。

2) シャー・アッパースの魔鏡とは、ちょうどあらゆるものを見渡すことができると知られた「ジャムシードの杯」のようなものだ。シャー・アッパースの魔鏡は、特にアーザルバイジャンの邑々で有名だ。シャー・アッパースと関係する楽しい物語がいかにも多いか、そしてこの魔鏡はそうした物語の情景に多く登場している。

087

〈第 60 篇〉

セタレ伯母さんがナズクを作ってくれた
よくミル・ガデルもひと切れつまみ食い
くすねて、食べて、仔馬のように跳ねていた
ナズクをくすねて得意げな笑い声
竈の鉤で伯母さんにびしゃりと背を打たれた

【作者注解】わたしには父方に4人の伯母がいて、歳の順にあげるとハデージェ・ソルターン、セタレ（セタレ）、サーラー、サイヤーレである。既に最初の3人は世を去った。

ナズクはタブリーズではナーズィクとも言って、田舎の丸い菓子パンの一種だ。層になって美味しい具が入っている。ミール・ガーディル（ミル・ガデル）は伯母の息子のひとりだ。

〈第61篇〉

ヘイダルババ、アミル・ヘイダルはどうしただろう
またサマーヴァルで湯を沸かしているのだろう
仔馬も老いては、下顎で噛む
耳は果て、眉のうちに眼を失い
可哀そうな伯母さんの心は虚ろ

【作者注解】 アーガー・ミール・ヘイダル（アミル・ヘイダル）は伯母の夫だ。歳で隠居しているが、まだ意気はあり、楽しい冗談を飛ばして親戚のなかではまだ人気だ。鷹揚で、人との交友も活発だった。いつも茶を振舞うための湯をサマーヴァルで沸かしていた。

〈第62篇〉

伯母さんはミル・アブドゥルの言うことを
聞いて、しかめ面して、口をすぼめ
あんななど湯灌師に渡してやる、と悪態ついて
言い争いは、しかし小気味よく
二人は肉を食したあとは、寝床を敷くのだった

088

〈第63篇〉

フェッゼ伯母さんはホシュゲナーブの花だ
アミル・ヤフヤは従姉に頭があがらず
ロフサレは才気ある、愛すべきアルティスト
セイイエド・ホセイン、ミル・サレフを口真似で囓う
アミル・ジャアファル、我を折らずに血が降ろう

【作者注解】

- 1) フェッゼ・ハーノム（フェッゼ伯母さん）は父の（母方の）伯父の娘で、昔も今も、ホシュゲナーブのセイイエドの家系にあって尊敬を集める人である。
- 2) アーガー・ミール・ヤフヤー（アミル・ヤフヤ）は亡きマジュドッサーダート（作中ではマジュデュッサダト）の兄弟で、亡きアーガー・ミール・モスタファアの第二子だ。心根が好く自由闊達な人物で、英雄叙事詩、特にシャーナーメを愛好していた。これは亡き父上から引き継いだものだ。

3) ロフサル・ハーノムは父の（母方の）伯母の娘で、セイイエドの家系にあって大いに尊敬を集め、今はテヘランに住んでいる。ただの真似ごとの域を出て芸術家を目指している。

4) アーガー・セイイエド・ホセインは、わたしたちの従兄弟のひとりで、人好きのする、愛想良い、そして穏やかな人物だ。三十年この方、シャガーギーの一族と係累ができて、グブチャグに定住している。

5) 亡きアーガー・ミール・ジャアファルは、亡きミール・ガファールの長男で、事業家で大胆な人物だった。けれど邑に起こる諍いの当事者になると、彼は我を折らず、身の危険を負うことになった。

〈第64篇〉

朝も早くから、牧童たちがやってくる
羊、子羊の鳴き交わす声が屋根、煙突に響き
伯母さんは幼子らをむつきくる襦袢で包む
窯から煙は立ち上り
パンの香ばしさと熱さ

〈第65篇〉

群れなす鳩は飛び立ち
陽は輝き、黄金の幕を開く
開かれた幕は、身をひそめて逃げてゆく
陽が昇り、山の偉容はさらに増す
自然の美貌はふたたび若さを取り戻す

〈第66篇〉

ヘイダルババ 雪をいやまなみだく山脈を過ぎて
夜の闇のなかでキャラヴァンは道を見失い彷徨う
テヘラン、カーシャーン、どこにいても
わたしの眼は遠くから山々をみいだす
想念に山々が浮かび、前へ後ろへと像を結ぶ

〈第 67 篇〉

また山裾に広がるダムガヤの岩山に登りたい
 そこに過ぎ去った時を涙の裡^{うち}にみつめたい
 そこで何が心に浮かぶやら見たいもの
 あのとときわたしも雪とともに涙して
 冬に凍えた心を暖めていた

【作者注解】 ダムガヤ (Damqaya) とは岩の屋根を意味する巨大な岩だ。樹木の枝のように山から分岐して、屈まっている。岩の下に室のような洞が形づくられていて、冬に夏に、旅人や牧童が寒さ暑さから逃れる場所だ。そして岩屋根に上って周囲の景色に見入って楽しむ子供たちもいたものだ。ダムガヤは山の懷、シャングアルアヴァとキュッルジャの邑の間にある溪谷のうえに位置している。

〈第 68 篇〉

ヘイダルババ 花のつぼみは微笑んでいる
 けれど悲しいかな、心に負った傷は血にまみれている
 生きることは真^{ほん}つ暗な牢獄
 この牢獄の半戸^{はんど}を開くことはできない
 この隘路から救いを得て、逃げのびるものはない

〈第 69 篇〉

ヘイダルババ 空は一面霧に蔽われた
 日々は過ぎたときよりも禍々しい
 わたしたちが散り散りにならないよう乞い願う
 善きものはこの手から奪^らわれた
 わたしたちの日々は惨めに落魄^{らくはく}した

〈第 70 篇〉

呪わしいこの運命を問うがよい
 お前の仕組んだまやかしに何を望むというのか
 空の星をふるいにかけてようとでもいうのか

大地が砕けようと、崩れるがままにせよ
シェイタンの証かしよ、消え去るがよい

〈第71篇〉

荒々しいこの風に吹かれて飛翔したい
山すそをゆきかう流れに身を任せたい
遠くへ去った親愛な人々のために涙したい
わたしたちを解りあえなくしたのは誰なのか
わたしたちの地で——去った友は誰なのか、残った友は誰なのか

〈第72篇〉

あなたのように、わたしの吐く息は山へ広がる
あなたもこの吐息を返して、わたしの声を空へ届けてほしい
願わくば梟が狭所に囚われないことを
ここには囚われた獅子が吠えている
信義なき人々を空しく呼び求めている

091

〈第73篇〉

ヘイダルババ あなたの血が情熱に沸くとき
あなたの懐を飛び立つ鷹が、空の高みをめざすとき
絶壁の岩と高さを競うとき
高みへ上れ——見よ わたしの志を
そびえる木のうえで頭をさげよ——見よ わたしの姿を

〈第74篇〉

ヘイダルババ 夜 鶴が過ぎてゆく
コログルの眼は闇夜に黒い鳥を見分ける
天馬グラトに乗って刃を振るう
ここで俄かに物語は大詰には至らない
エイヴァズが来て偉業が成るまで、わたしも休まらない

【作者注解】 この詩篇は「コログル」の物語についてだ。もしコログルのお話をしてくれるなら、私の眠たくなった耳も、話の終わりを聞くまでは眠れなかった。コログルの物語はアーザルバイジャンの英雄譚で最もよく知られたものだ。話の筋はこのようなものだった。主人公のコログルは息子エイヴァズを戦に送り出した。エイヴァズは日没になっても帰ってこない。コログルは夜の闇のなかであらゆる方角へ視線を走らせ、黒いものでもくっきりと見分けていた。ときには風に、ときには鶴の群に息子の行方を尋ねていた。闇に朝の光りが射し、朝も早くに、コログルは音に聞こえた名馬に跨ると戦いに打って出た。敵を打ち負かし、捕らわれていた息子を解放し、連れて帰った。エイヴァズの帰還とともにお話は終わりだった。

【訳者注解】 コログル (Koroğlu) はトルコ、アゼルバイジャンを含めたテュルク系諸民族に広く知られる伝説上の義賊 (トルコのキョロール)。「盲人の息子」の意味で、駿馬の目利きであった父が、領主 (トルコでは一般にボルであるとされるが、アゼルバイジャンのヴァリアントではトカトとされるものが多い) の勘気に触れ両眼を抉られて追放されたことからこの名があり、父に対する領主の仕打ちに敵討ちをする物語を基本に様々の派生的な伝承が形成されている。また「虐げられたものがアウトロー化して、支配者に非合法の手段で挑み正義を完遂する」という勧善懲悪物語の枠組みは、トルコのヤシャル・ケマルによる国民的人気小説『やせっぽっちのメメド (İnce Memet)』にも活きている。

〈 第 75 篇 〉

ヘイダルババ、高潔の勇士らが数多産まれんことを
卑劣漢どもの鼻が土埃となって崩れんことを
峠道で狼らを捕らえ、縊って駆除せんことを
子羊らが心安く草を食むように
なお羊らが肥え、育つように

〈 第 76 篇 〉

ヘイダルババ、あなたが心楽しくあるように
世が続くかぎり、あなたの口が美味で満ちるように
あなたの麓を過ぎるものが心に憶えられるように
わたしは詩人の子、シャフリヤール
生きるとは、悲しみに悲しみを重ねること

第二部（1964年）

〈第77篇〉

ヘイダルババ、あなたを求めて帰ってきた
あなたの懐に再び眠りたいもの
捨てんとした世を、どうやらここに戻す
子供の日々よ——わたしたちにひととき還れ
光輝く日々よ——涙したたる頬にひととき笑みを

〈第78篇〉

ヘイダルババ、あなたはわたしを連れ出して来た
わたしたちの郷へ、わたしたちの巣へ、届けてくれた
あなたは幼いときのユスフを失っていた
尊いヤグブよ、わたしが逸^{はぐ}れても、なおあなたは見つけた
放逐されても、なおあなたは狼の歯牙からわたしを奪い取った

093

【訳者注解】ユスフ、ヤグブはそれぞれ、旧約聖書のヨセフ、ヤコブのアゼルバイジャン語表記。

〈第79篇〉

往きし人々の虚ろをここに見る
ハン・ナナは、白い経帷子に包まれて
どこへ行こうと、わたしの背後についている
「お前かい、来たんだね——どうしてこんなに遅れて来たんだい？
もどかしさがあなたと取っ組みあって、ついにあなたが打^{うちや}遣った」

【訳者注解】ハン・ナナはシャフリヤールの父方の祖母。第一部第28篇「作者注解」を参照。

〈第80篇〉

わたしが目にしたキャラヴァンは、到達してはまた発ち
離別のシェルベトを飲み干していた
わたしたちの人生は流離^{さすら}って、ここを過ぎる
帰り道のない道へと去って往く
路傍の石に、叢^{くさむら}に土埃をたてて

〈第81篇〉

ここに甘美な記憶が眠っていた
岩山と互いに囁きを交わしていた
親愛な人たちは、わたしたちを捨てていった
わたしが見遣ると、身を起こして眺めている
また横たわって、火に包まれ、燃えている

094

〈第82篇〉

我らが一族はここに炉辺を造っていた
今は狼、鳥の棲家と果てた
日が沈み、灯りが消える
「そして街に親しい人はおらず
毛皮の汚れた羚羊、駱駝[※]ばかり」

【訳者注解】

※この二行はアラビア語。マシュルーテチーによれば、ジャーヒリーヤ時代のアラブ詩人アービル・ビン・アル＝ハーリスの詩句の引用。

〈第83篇〉

時は過ぎ、地平に砂塵が立ち上る
キャラヴァンのように、遠景に砂と埃が
煙が来て、心を巻き込む
心の声は「時よ、憐れみを——止まってくれ
わたしは往ってしまった人々を眼で追っている」

〈第84篇〉

時の水車が回る
生けるものはその白に投じられる
とくと見るがよい、人はいかに騙されるか
幸せは永く自分にあると望みを抱くが
自らの墓を眼にしても、なお悟ることはない

〈第85篇〉

いにしえびと

古人らの朽ちた軀は土塊に埋もれ
生き延びても燃れた外衣を羽織っていた
モッラー・イブラヒムは蕩^{とろ}けて縮こまっていた
シェイヒュルイスラムは達者にしていた
ノヴルズアリは俊敏に死の鉤爪をかわしていた

〈第86篇〉

095

老いたものたちは七十の経帷子を朽ちるままにした
若いものたちは世界の憂いに言葉を失った
花嫁たちは身も心もやつれ果て
ラフシャンダの手を孫が掴み
ナナ・グズの手は婿が、嫁が

〈第87篇〉

ありがたいこと、わたしたちは来て、相まみえることができた
逝ったもの、新たに生まれたものを訊ねた
仲たがいしても、アッラーのお恵みでまた親密に戻れた
わたしたちは再び会えるか、会えぬか
今生にその時はありや、なしや

〈第88篇〉

ここに夢想の空間は広がっている

山々、石つぶて、すべてはわたしを見知っている
 わたしを見るや、ヘイダルババはこう問いかけた
 「お前が世に^{とうてき}投擲した声は何なのか
 さあ、いずこにお前は留まるか見たいもの」

〈第89篇〉

^{キャジャールヴァ}駱駝籠に乗って、この川を幾度も過ぎ
 この水脈からどんな水を飲んだものか
 この野原で草を刈り取った
 仔山羊らをくすぐっていたわたしの日々
 仔山羊のように飛び跳ねたわたしの日々

【訳者注解】 ここの仔山羊の原語 çəpiş は2歳までのものを指す。

096

〈第90篇〉

脱穀場で「アラダン・フル」遊びをした
 蟻のように群がって、皆、蠢いていた
 抜き足差し足、菜園に向けて転げてゆき
 樹の枝を切ってチャリング・アガジュをつくった
 番人が怖くて震えていた

【訳者注解】 アラダン・フルとは、円陣の中央に立った一人が多数と格闘する子供の遊戯。[Mashrūtechī 1392: 168] チャリング・アガジュは長短二種の木材を用意して、長いものを棍棒のようにして短いものを打って遊ぶもの。

〈第91篇〉

この牛小屋で金毛の雌牛が仔を産む
 ハン・ナナは乳を搾る
 母の匂いが天井から、壁から注ぐ
 逃げないようにわたしは仔牛を抱きしめる
 「ご覧、乳桶はいっぱいになっても、溢れちゃだめだよ」

〈第 92 篇〉

この屋根のうえで、よくガブ遊びに興じていた
わたしは他の子たちのガブを取り上げたものだった
鉛を入れたサッガを幾度も買っては売っていた
子供であれば、なんでも嬉しいものだ
今は世々にも稀なわたしたちの嘆き

【訳者注解】 この詩篇で描かれるのは羊の関節の骨でできたガブ qap という玩具をつかう子供の遊び。地面に円を描いて、中に各自が同数のガブを散らす。骨に穴をあけて鉛を注入した大きなガブ（サッガ saqqa）を投げ、狙い定めたガブを円陣の外へ出したらその子のものになる。[Mashrūtechī 1392:170]

〈第 93 篇〉

学舎は残り、子らはそこに学んでいる
書いては取り消し線を引き、帳面をなめる
モッラー・イブラヒムは、家族とともに存命だ
けれどここに残る友はひとりとしていない
ここにわたしたちを憶えるものはいない

097

〈第 94 篇〉

この学舎に才気ある生徒が多く籍を置いた
ミュセイイェブも、マムドサンもいた
ひとりは級長、ひとりは選手
アーホンドはわたしたちの遊びに加わった
わたしたちにみずから遊びを教えてくれた

【訳者注解】 アーホンドは、第一部第 47 篇「訳者注解」を参照。

〈第 95 篇〉

君たち、マムドサンはどうしたのだ
あの子は若いのに死んでしまったそうだ

なぜ、なぜなのか？ 鼻から出血したからだ？
風が吹く、見遣ればマムドサンはいない
この邑に血を止めるものはいない

〈 第 96 篇 〉

教えてくれ、ミュセイイェブになにがあったのか？
グラムが涙目に笑みを浮かべて答えた
あの子も、食うにもこと欠いて、死んでしまった
憐れ、労苦の糧をわたしたちと分かつもの
餓えの果てに逝くものは、なお尽きることなく

〈 第 97 篇 〉

この学舎で詩の蜜をわたしは味わった
アーホンドから口移しで、我がものにした
時としてわたしはアーホンドを騙したもの
頭が痛いといって逃げ、行ってしまった
目の届かぬ庭へと姿をくらました

098

〈 第 98 篇 〉

休みになると、学舎から皆出て
皆、戸口に固まって押し合っていた
道ででくわせば、なんでも飛びかかって引き倒した
子供だと言うな、縄をちぎった仔牛だ
それも一匹じゃない、五十匹だ

〈 第 99 篇 〉

マリク・ニヤズは郷を出奔して、今はいない
アミル・アスランは卒中で年来臥せっている
皆は逃れて、谷間に身をひそめる
哀しきパンよ、人はそれを天球に求め

命を長らえんと、訴え叫ぶ

〈第 100 篇〉

悲しいかな、鄙に灯りを点す火はなく
旦那さまがたに末代まで光あらんことを
旦那さまがたに誰か解らせられないか
この民が何の罪を犯したのか
虐げられたものらの嘆息が、あなたがたを捕らえるがよい

【訳者注解】ここに「旦那さまがた」と訳出した原語 *arbab* は、地主たち（ペルシア語 *arbāb* または *mālek*）のことである。この一篇は、地主層への怨念と呪詛をこめている。

〈第 101 篇〉

なにを買おうと高くつく
安いのは農夫の労苦
収穫人より、熟れた実のほうが値打ちはある
邑の子らは茶に添えて角砂糖を齧ろうと
道路の工事場の仕事を望む

099

〈第 102 篇〉

邑人たちは、花嫁のように世界を飾り立てる
女たちは継布にさらに継を重ねて繕う
他人を飾り立てても、自らは裸のまま
今も炬燵掛けは、安物の布で作っている
子供らの脛も足もむき出しのまま

〈第 103 篇〉

この小庭に葱の種を蒔いた
水を流し、畑の畔に目配りし
伸びれば摘み取り、羹^{あつもの}に注いだ

長く切った葱は匙から垂れ下がり
脂っこいが、渴いた口には瑞々しい

〈 第 104 篇 〉

この山裾で羊の群れを分散させた
見失わないように、星のように数えた
案山子も運んできて、岩にもたせかけた
案山子はまるで猪のよう
遠くから眺める狼には、牧童に見えた

〈 第 105 篇 〉

ハン・ナナが病気に罹った年
冬、寒風が吹き、冷風が吹き
冬去れば、雨あり、早瀬あり
わたしたちは往こうと旅立ちの荷をまとめたが
早瀬は轟き叫び、還らざるを得なかった

100

〈 第 106 篇 〉

ニサン
四月になれば雨に遭う
瀬に逆らって誰が勝てようか
わたしたちは言ったもの 雨だれを集めて瀬になるのだと
馬車屋のバラクシュが雨で足止めされて
イマミイエの茶店に留まっていた

〈 第 107 篇 〉

遠ざかるほど畑は遠景にかすむ
焚火を熾して、青い穂を燃やす
笑えば上等
皆も笑おう、それが本望
心の憂さを分かちあおう

〈第108篇〉

鞍袋を背にかけた驢馬が刈り取った麦を運ぶ
畠から驢馬は裾野の道を上ってゆく
豊かな恵みは水流のように道々を往く
あなたの業は、普く心^{あまね}に覚えられた
あなたが霊薬を望めば、叶えられた

〈第109篇〉

今、人は貪欲な狼のように飢えている
しゃがみこんで、怒気を孕んだ眼をして戸惑っている
仲間が弱り、衰えるのをじっと眼で窺っている
頰れるのを待ち構え、死骸を裂こうとしている
尻から噛みつき、取り分を箸取る

〈第110篇〉

IOI

ヘイダルババ、あなたの懷に月桂樹が繁り
山脈の宝蔵がある
けれど、あなたの胸に似た山麓は数多広がり
広がる裾野は尾根と語らっている
山とともに、空もまた言葉を交わしている

〈第111篇〉

見てほしい——どこからわたしはあなたに吐息を送ったか
この吐息を返し、この声を世界に宣べよ、と私は念じた
あなたは虫けらをスィーモルグの高みへ導き
あたかも風に、春風に、あなたが翼を与えたかのように
全地からわたしの声に和する声があがった

【訳者注解】 スィーモルグ (Simorgh) はペルシア神話に起源を有する霊鳥。フェルドゥースィーの『王書 (シャーナーメ)』でザールとロスタム父子の支援者として、またアッタールの『鳥の言葉』に神秘的な神的顕現の象徴として登場するなど、

ペルシア語文学の多様な主題となり、またイラン、コーカサス等のフォークロアでも広く知られる。アゼルバイジャン語では Simurq または「翠玉の霊鳥」を意味する zümürd anka の名で知られている。

〈第 112 篇〉

ヘイダルババ、わたしはあなたを故郷と思っていた
故郷を求めて、ためらうことなくやって来た
あなたの姿を目にして、涙を拭い去った
しかし、あなたの裡にも痛ましい「異郷」があった
暗黒の牢獄、苦々しい水薬があなたの許にあった

〈第 113 篇〉

誰一人、わたしたちの道を捻じ曲げぬものはなかった
足元を掬おうと謀らぬものもなかった
人の子で、わたしたちを支えるものもなかった
悪鬼たちを抱きしめて、あなたがたは徘徊した
人々を踏みつけにして、あなたがたは押し潰した

〈第 114 篇〉

壁が打ち建てられて、わたしたちに陽はあたらず
牢獄は闇に閉ざされ、眼と眼をあわせることもできず
昼なお眼はランプを放すことができず
川が溢れて水浸し、我が家は池となった
哀れな貧しい家は崩れ落ちた

〈第 115 篇〉

まずわたしを歓迎した
それから掌を返して、わたしの仕事を^{けな}貶した
あなたたちの思うままに、師匠を欺いた
恥じることなく、往き過ぎる人生
冬が去ると、熾火のうえに不名誉は残っている

〈第 116 篇〉

わたしの道は愛の大路
わたしの最後の言葉は真実の意思
愛の誓いの宣明
わたしには誰に対しても含むところはなく
わたしには政治を名に負う病もない

〈第 117 篇〉

真実とは何だろう？ 澆神の輩を遠ざけよ
光明から出でて、闇へと道に迷うこと勿れ
回旋する独楽のように騙りに果てること勿れ
悟ったであろう——澆神は果てることなく
金を貰えば、納めようとポケットを縫った

〈第 118 篇〉

シェイタンはわたしたちのキブラを貶め
アッラーの示す道からわたしたちを逸らせ
蛇の棲む泉へとわたしたちを誘導し
善意を装って、あなたがたの水路を河にしたと言う
しかしその水はわたしたちに毒を盛る

〈第 119 篇〉

ヘイダルババ、不満はいったい何を生むだろう
忍耐と辛抱こそが、虐待の家を打ち毀す
ダルヴィーシュであれば、忍耐の手を固く握りしめる
来るが良い、帰ろう——貴顕紳士らに交わろう
今一度、愛の言葉に浸ろう

〈第 120 篇〉

子らは互いに意を決している
この冬はまた春になるだろう
小川と草原に鴨、鷺鳥がいっぱい遊び
わたしたちは景色を目にして、喜び満ちて飛び立とう
折れた翼を広げよう

104

〈第 121 篇〉

この小庭から梅を摘んだ
冬には屋根に広げて干した
日々、口実をつけては向きを変えに出た
冬の蓄えを夏に食して満足し
潤沢な恵みを人々に供したのだ

〈第 122 篇〉

家々は残るが、住む人はもういない
炉辺の燃えさしだけが光を放っていた
往った人々——いくばくかの言葉は残る
かなしいかな、わたしたちの言葉も残る
かなしいかな、誰かしらはわたしたちの言葉を伝える

〈第 123 篇〉

わたしたちが往ってから、炬燵の四隅に
邑の物語のなかに、残ってゆく
お婆さんたちの火打石、火口^{ほくち}の布切のなかに
ヘイダルババ、あなた自ら言葉を混ぜて
酒のように、物憂げな眼に振舞ってくれ

〈第 124 篇〉

アシュグは語る——かつて想い人がいた
愛ゆえに火が点き、焦がれて燃えた
サズを手に、言葉とともに「シャフリヤール」がいた
焰は燃え尽きようと、彼の火は尽きることなく
蒼穹は回動しようと、彼の天空は揺らぐことがなかった

〈第 125 篇〉

ヘイダルババ、さげすまれた人々に高閣^{こうかく}が建つように
わたしたちの後、残る人々に栄光があるように
往った人々が、来る人々の模範となるように
わたしたちの子らが、正信^{しょうしん}を拒むことのないように
すべて空疎な言葉に惑わされることのないように

ブルド・ガラチョルル・サハンド^{※1}

シャフリヤールによせる手紙

Hörmətli Ustad Böyük Şəhriyara / شهریارا مکتوب

片手にペン、片手に紙片
屋根から、壁から窺っている
畏友の園を逍遙したいとの希^{のぞみ}を抱くも
扉は閉ざされ、道はいずこにあるやも知れず

柵のむこうの畏友に焦がれるわたしは
閉ざされた園を冒そう、その水は硝子
マルメロは琥珀、柘榴はルビー
アーチはトルコ石、壁は薔薇

106

青いエイヴァーン^{※2}で、金星はサズを奏で
塔では土星が弓の弦^{つる}を引いている
わたしはその城へ入るに相応しいのだろうか
けば立ったこのパバグ帽^{※3}、壊れたサズとともに

壮麗、絢爛の扉が
わたしに開かれぬとあれば、それは何ゆえ
シャーと臣民の言葉は交わらず
わたしは天幕に棲み、彼は誰あろう「シャフリヤール」^{※4}

ヘイダルババより許しを得よう
謝絶の答えは、よもや聞くまい
わたしはシャフリヤールの勅許を得ている
詩人同士が相まみえることを得ずとは言うまい

否、わたしとてもサハンドだ、高く顔を上げ
裡には尽きることのない愛の炎があり
頭に黒雲が垂れ込めようと
わたしには花咲く春の愉悦がある

片手に火、片手に水
ひとつの顔は暗い冬、もうひとつは春の顔
友に、善意の人に、暖かな抱擁があり
敵への眼差しは霜と雪

チューリップ、花咲くわたしの草原に
牧童たちが来て草場を求めれば
わたしの愉悦に顔をそむけること勿れ
王者に相応しいシャール※6もわたしのもの※5

願いを込めて、心は翼を広げ
ガーフ※6の砦を越えんと飛翔し
空の高みに、石の城壁を越え
天翔ける鷹も疲れて下を往く

壁よ、壁よ、お前たちが鋼であれば
わたしは金剛石の刃となって切り開こう
我が父祖ファルハド※7が矛に帯びた責務を手に
ビストゥンであろうと、岩を砕き、切り開こう

壁よ、壁よ、わたしの往く道を示せ
わたしは火の山——吐く息は荒ぶる風
わたしは雲ブルド——顔をしかめ
わたしが嘆くなら、世界を激流が攫ってゆく

わたしの裡では叫びと悲鳴が絞めあげられて
私の声に、壁も友も答えない
石からも声はあがらず、同胞からも声はない
あたかも波が虚空に消えるように

わたしを震撼させるものはあるいは幻か
それとも友から引き離すのは妖術師か
聞けば、愛しい人は硝子の城にいる
頭頂から髪で絞首台に吊るされている

^{みやい}宮居も妖術もサハンドを^{おど}嚇かしはしない
愛という名の魔法がある
神の至高の名前、そして神秘の名前こそ
^{イスミ・アザム}^{イスミ・シヤブ}
閉ざされた扉を自ずから開くもの

108

開け、開け、閉ざされた扉よ
愛ゆえ、心願ゆえに
錠前よ、溶けて流れよ
心ゆえ、至心ゆえ

烈風が吹くように、天は唸っている
雲は湧き立ち、稲妻は光る
火と焰が地の表に広がっている
鉄の門は水と溶けて流れている

耳に達するのは嘆きの声
ここに獅子が檻に繋がれ、吠えている
まことにわたしは卑屈の身
我が同胞は檻に繋がれて、わたしを呼んでいる

手を導いて、わたしに道を往かせ給え
この心は火を帯びて、わたしは光を放つ
シャフリヤールの頸を鎖に繋ごうというか？
わたしは噛みつき、引きちぎって、解いてあげよう

わたしの腕に鉄の枷
鎖はこの身体を刺し、噛む
親愛な同胞よ、今わたしを許し給え
わたしは自らの隷属を忘れていた

親愛なシャフリヤールよ、わたしを許し給え
怒らないで欲しい、悲しまないで欲しい、あなたの思いは那邊にあるのか
あなたの同胞は卑屈ではない
あなたと同じく、彼もまた囚われの身だ

109

あなたは言わなかったか、我らの民のなかでは
委託者のために受託者が身銭を切るのだと
母は、愛の炉が燃え尽きぬようにと
心を溶かして、燈火へ注ぐ

普く知るわけではないが、我らの郷土では
友情と愛は幻ではない
けれど熱く、輝く太陽も
ときには雲に隠れてしまう

王者よ——おそらくは
実際に行いを誤ったのは我ら
まさにこの誓いの脆さは我らのゆえ
咎は他人のものではなく、他ならぬ我らのもの

信義なき一群のいかさま師に
負けて我らは素寒貧
義をもって、不実の者どもに慈悲をかけ
今や不実の者どもを頼みに仰ぐ

富める者に素焼きの鉢を乞い
我らの甕を自ら叩き壊し
自ら抜き放った刀の鞘を好まず
我らは民を捨て、民も我らを捨てた

我らは、いつ民に嘆きの声をあげたのか
庭園は凍てつき、果樹園は涸渴していた
民は我らに何をし、いつ嘆きの声をあげるのか
口に鍵をかけ、舌を封じている

110

今、成るべきは成り、過ぎゆくことは過ぎている
こぼれた水はもう甕を満たさない
背後から投擲される石は足首にあたる
涙を注げども、傷を癒すことを得ず

わたしはサハンド、あなたはシャフリヤール
来たれ、我らは偉大なタブリーズに高く顔を上げさせた
余所者たちの石を捨て去ろう
我らが民の憂いを抜き取ろう

わたしは詩人、この世界をあなたはどうか見るのだろう
塩を食して、塩壺を壊す人々がいる
価値を知るものは、友に命を捧げるべし
価値を知らぬものには、誓いを立てるも虚しい

もはや他人の灯火の油とはなるまい
我らが郷の民は闇のなか
余所者の炉辺に燃えて、燃え尽きること勿れ
我らの家は寒く、凍てつく冬

燃えるまいとわたしは言わぬ
燃える勿れといえ、哀れな蛾はなんとしよう
不実な友の火に燃える勿れ
燃えよう、我らの民、我らの郷のため

跳ぼう、不実な花の面から
篤実な民の懐へ
我らの尽きぬ愛ゆえに接ぎ木しよう
凍てついた民の花木の枝へ

III

ひと処から立ち上がり、我らは悲しみに打ちひしがれた
我らの郷土の大地をくまなく周ろう
民とともに泣こう、ともに笑おう
我らの真珠を祖国の糸に通そう

あの美しい街で、愛おしい土地で
そこで詩人が高吟する舞台は数多ある
痛ましくも悶えるタブリーズの想いは強く
あなたは他ならぬその一人なのだ、親愛なシャフリヤールよ

今、我らは取るに足らぬ一滴に過ぎぬが
滴り、零れ、落ちるうちに湖となろう
人と相和そう
水に交われば、流れる瀬になろう

山あいを後にして、海へ辿り着こう
渦巻く淵、波に轟く叫びをあげよう
熱い太陽と抱き合おう
熱を運び、湿潤な空気を集め、雲へ上ろう

跳ぼう、あの乾ききって荒れた大地へ
水がないと訴える山々へ
護り、手をかける者もなく、春もなく
花もなく、葉もなく、実も結ばぬ園へ

霜、嵐、冷たい風よ
我らのうえに震えるがよい、我らは蒼ざめる
泣こう、聳える山から転げ落ちよう
堅牢な巖石を下から覆そう

112

河に堰を造ろう、溪谷を満たそう
溢れて流れる水よ、虚しく流れる勿れ
渴いていた藪の根を潤すがよい
トウモロコシの畑よ、渴きに天を仰ぐこと勿れ

サハンドに、そしてヘイダルババに、薔薇よ咲け
その頂に天幕をたてよ、シャフリヤールよ
花咲く大地を見渡そう、歌を詠もう
詩人に幸あれ、詩に幸あれ

我らの世界から怨恨の根を切り
愛から新たにたて直そう
両翼を擦り、雷光とともに
星の高みへ往こう、太陽に止まろう

わたしは詩人——わたしの言葉を疎む勿れ
耳を傾け、見よ——世界を覆うひとつの声
この轟音に心を閉ざす勿れ
それは断ち切られる鎖、切り崩される鉄格子

【訳者注解】

※1 「サハンド」はタブリーズの南にある火山の名前。連峰でそのなかで最も高い岳が3,710m。東アナトリアと北西イランの火山帯でアララト山（現トルコ・アール県）、サヴァラン山（現イラン・アルダビール州4,740m）に次いで三番目に高い火山で、東アーザルバーイジャーン州内で一番高い山。またイランのアーザリー詩人で本篇の作者であるブルド・ガラチャオルル（Bulud Maşadi Mütəllib oğlu Qaraçorlu Səhənd, 1926-79）の雅号でもある。サハンド（山）詳細については Encyclopaedia Iranica 記事参照（2021年1月8日閲覧）。<http://www.iranicaonline.org/articles/sahand-mountain>

※2 エイヴァーンとはイランの建築様式で、建物の外壁に、前方開放型で造成する一種のテラスかホールのような半外部の空間。多くの場合に天井部分がアーチ型の穹窿構造になっており、イランではここのアーチ部分に施される鍾乳石飾りが特徴的である。

※3 パバグ帽（アゼルバイジャン語 papaq / ペルシア語 pāpāq または pāpākh / ロシア語 папакa）とは、コーカサスからイラン、ロシアに広く普及した高い円筒形の毛皮帽。

※4 シャフリヤールは君主、王者という意味。

※5 シャールドは東アーザルバーイジャーン州ボスターナーバード郡のサハント山の麓にある村の名前。王者の邑、王者の地という意味。

※6 ガーフの砦 (qaf qalası) は霊鳥スィーモルグが棲むといわれる伝説上の霊山ガーフのこと。S・ヘダーヤトの民俗誌的作品『不思議の国 (Neirangestān)』には、碧いエメラルドの山で空の碧さはそこに発し、高さは五百年、広さは二千年の行程、とある（奥西俊介訳、平凡社東洋文庫）。

※7 ファルハドは伝説上の英雄で、サーサーン朝の帝王ホスロー・バルヴィーズの愛人シリんに恋し、シリンを賭けてホスローが命じる試練——ビーストゥーン（現在のイランのケルマンシャー近郊の遺跡、ペルシア語 Bisotūn / アゼルバイジャン語 Bisütun）の急峻な絶壁に路を拓くこと——を受けて立つ。この試練を達成しそうな勢いに狼狽した王は、姦計を巡らせシリンが死んだという虚報を伝え、と、衝撃を受けたファルハドは山から落ちて死ぬ。この物語はペルシア語、トルコ語、パシュトー語、ウルドゥー語やクルド語まで、文学・フォークロアから美術まで広く主題として多くの創作を生んでいるが、なかでもペルシア語古典叙事詩の大家ニザーミー・ガンジャヴィー（1141? -1209?）の『ホスローとシーリーン』におけるエピソードが文学的に最も洗練された例となっている。

サハンドよ

Səhəndim / سەھەندیم

サハンドに対するシャフリヤールの答礼詩

至尊の我が山、灰色の縞模様のパパグ帽、人々の守護者
 栄えあるサハンド、吹雪が峯打つサハンド
 ヘイダルババのように雪をいただき、霜に覆われてあなたは立ち
 静いあれば、和を計らい
 ついには雲を絹糸で大地に抱き取り
 空から啓示をうけ、蒼穹の神秘を語り
 今、白い皮の外套に包まっても
 春ごとに緑のマントに掛け替える
 辛抱すれば、熟れない葡萄からもハルヴァ^{※1}をいただける
 山裾^{くぐい}は鵲たちの胸のような純白で
 そこここに甘い水湧く泉あり
 鏡のような朝、風が輝き
 そこにはなまめかしい緑の巻き髪
 雨よ、降るなら降るが良い——急流となれ、流れるまま流れよ
 あなたの周りに溪谷がひろがる
 山鶉^{うずら}は雛と飛び交う 辺りをよく見るが良い
 峯から広がる崖と深い淵
 裾野には娘たち、頬の色はチューリップ^{べに}の紅
 子羊の群が草を食み、葦笛^{こうかん}の喘ぐ音はなんと美しいことか
 あなたは月のように光環を纏う
 花々で装いを整え、あなたの優美な姿は花嫁のよう
 風吹き渡る泉水に、あなたの心願はなんと深いことか
 水のおもてに薔薇色の光輝
 木の枝はサズの弦のように川と草原で震え
 その弦に風が渡る——それはコログル^{※2}のサズの音

鴨が湖で人目を忍んで、妖精たちと水浴すると
鶯鳥は白い羽を広げて艶めいたしぐさをする
冬来れば、春また来たれ
今しもノヴルズ^{※3}の薔薇、雪の花が咲くだろう
川は、降雨に浸されても、陽とともに微笑むだろう
あなたの頬をすみやかに洗い流すだろう
冬、山鶉狩りに曠野へ駆け出す若者たち
雪のなかに湧き上がる笑い声——軽やかな鶉たちを追うがよい
春、あの山裾で恵みの食布を羊飼いらが開くとき
肥えて乳の香る群——絞りたての乳を焚火で沸かすがよい

あなたの名を冠したこの詩人、あなたも彼の名を冠するだろう
あなたが彼に滋味を与えれば、彼は百の滋味を返すだろう
すべての必要を神が備えてくれよう
同じ名を名乗るとき、あなたはさらに高らかに聳え立ち
頭を擡げれば、ダマヴァンド^{※4}の山から貢納を取り
獅子の鉤爪から冠を奪う
彼も詩人、文芸のなかの至尊の山、栄えあるサハンド
彼も詩をもつて、あなたのように星辰の穹窿に縄を投げる
彼もスィーモルグから技芸を学び
見入るがよい、詩を書けばペンから珠玉が放たれる
まるで星々が篩にかけられるように
言葉を紡げば、見よ、薔薇とピスタチオと砂糖が混ざる
貴顕紳士の詩人に幸いあれ
山の誉に相応しい詩人とわたしは憶える
あなたのように、高みの訓育を与える者とわたしは憶える
愛に、そして愛の人に篤実な詩人とわたしは憶える
空想の馬を細い枝で打ち
粉のような雲を巨大な馬に乗って踏みしめ
大地と天を回動させ、数巻の書を巻き上げ

時来れば

いずこの時空も瞬く間に切断し

往くもの、来たるもの——あの方、この方

いずこに留まったやら知る由もない

見よ、いかばかりの栄誉があらうか、ふさふさのパパグ帽に自らの言葉

詩の宝冠は首を垂れて、その面前に立ち尽くす

頭をこぼれんばかりの真珠で飾り、足にはチャリグ靴

その詩は天啓——天使たちが耳に囁く

唇には蜜が潤沢に溢れる

わたしが何を言おうと——彼もまた、山脈やまなみのように、自ず尊厳を守る者

压制者を挫く雪と風とともに、彼もまた志操を守る者

暴虐の压制者に打ち克ち、闘う者

残忍な王者の皮衣を蚤のように侵す者

身を屈めて貧しい人々の暮らし向きを尋ね

不幸な人々の勇気をみれば、勇気をもって人々を探し求め

不幸な人々に交わり

抱擁する

夜は真実の眼、シナイの山に燃え上がる火中にあり

油が溶けて、行燈のなかに燃えるは人々の心

葡萄酒を飲むのは愛ゆえ——チューリップはその頬に花開いた

それはひとりの青年——妖精たちは腕の水を飲む

真珠は温泉のなか

自然は愛しいビュルビュル——※5薔薇の枝で歌う

黄金の麦の穂を抱きかかえ

水は伝説——その魔法の庭園で語る

霧にむせぶ朝のなか

詩人の才知は、魔法がかかって、伝説めいた数多の庭園
ああ、その庭園とは『千夜一夜物語』の語り伝える庭
炎が広がり、山脈は燭光のように燃える
薔薇が笑えば、泉は哭く

詩人の裡なる世界は滅ぶことなく、そこに心を乱すものはない
ここでは、心に浮かぶ願いは叶い、果たせぬものはない
ここには「許されざること、許されること」がない——天国の庭園のように
彼は愛において憂うものはない
ここは愉悦の境地で、もはや諍いはない
ここでは夜々白銀の輝き、黄金から昼はなんと眩しいことか
エメラルドのような庭園、大理石のような平原
黄金色の毛皮の雌牛たち、淡褐色の眼をした雄牛たち
なんと美しいことか、月のような顔かんぼせは

117

花開く樹は、孔雀のように彩り豊かな傘を開き
それは「カーレヴァーネ・ホッレ」^{※6}、路を往けば、草原を彩る
山脈もキャラヴァンの駱駝の隊列、積荷は錦
サービルの街^{※7}へ向かって、駱駝引きはこの獣を導く
わたしの空想のなかのシルヴァン^{※8}へ

ここに雪が降る、けれど花はなお色褪せない
この自然の清新が永続しないなど、あり得るだろうか
ここに永生の誓いが満たされないなど、あり得るだろうか

地平を見渡せば海があり、入江がある
妖精のように鳥たちが降り立ち、鶯鳥は飛ぼうとしている
湖では娘たちが水浴する

魚は星のように湖に、海に輝いている

真珠の滝よ、瀬のように注ぐときかさかさと音が響く
風の音はこだまし、水は唸る

黄金の砦があった、瑪瑙の城があった
ラファエルの絵のような、旧約聖書エフデ・エティグの古からの景色
古き友に飽くこと勿れ

天国のような庭園には、天女※9と罪過があり
東屋に、エイヴァーンに、宝玉のような天女らが並び
天女らは硝子の酒杯を手をしている
水差しには薔薇のような清浄サフバー・イエ・タフリーの酒
不思議なことだ——覚めた眼にみる夢と君は言う
おお煌めきよ——深い眼差しは海を秘めると君は言う
空想のなかの楽園に隠棲したのだと君は言う

118

金星の宮はダイヤモンド、真珠の砦
ルビーは宮殿の魔法、工匠はハールートとマールート※10
そこにはマニが立ち尽くして驚愕の形相
戸口の番をするのはハールート

詩の、楽興の源はここにあり、泉に湧く
妖精たちのように、泉から散らばって遊び
そして詩人はそれを理解する

月明かりのように池に、泉水に満ち溢れ
女王はここで水浴びする——月のような麗人らとともに
薔薇の耳飾りをつけて

詩と音楽は愁いを破り
頬紅と香水で装いを整えた花嫁の

頭上に祝儀の金貨が降るように
キツネを、ウサギを放つがよい

色白の妖精たちは、黄金色の衣を纏った雲から
乳の湖へ降り立ち、女王と共に水浴を楽しむ
愉悦に浸り、自らを讃える
皆、満ちた杯を手に持ち、高く上げ
舞姫らに、詩人らに啓示をもたらすかのように
海の娘らに^{ことづて}言伝を送る
海の覆いは碧く、地平の天蓋は大空
鏡を通せば、天は地と等しくなり
語り部は己の詩のなかへと没入する

東屋は、月光に映える雲の下にあるかのように
眼を開いて、閉じてはならぬ——灯火のように燃えては消える
景色は蒼穹のように巡り、今もまた廻っている
影はひっそりと這^{はい}入ってくる

119

金星がエイヴァーンで女神の装いを整える間に
ハーフェズの威厳ある姿をそこに見るがよい
嬉しきかな
シーラーズのハーフェズとともにエイヴァーンに立つものあり
将棋に興じて、中央に坐するものあり
サズを奏で、盃を酌み交わすように
歌に興ずるものたちがあり
ハージェが美しい声で詩を詠じれば、皆魅せられてその場に佇む
その声に妖精たちはときに^{まどろ}微睡み、ときに目覚め
チューリップの火は、色とりどりのガラスの光彩に染まる
たいそう魅惑に満ちた眼とともに燃えている
隼の住まう我がサハンドよ、この宙空は翼を欲している

物語に富む我がサハンドよ、わたしの百もの物語を聞くがよい
『ヘイダルババ』ははじめの叫びをもって君を呼ぶ
さすらい人は獄に繋がれ、キツネを駆逐して獅子は唸る
騾馬は悪魔の蹴りに抗い手綱を断ち切る
『ダダ・ゴルグト』に君の声を聞いた——わたしは陣後の盟友と呼ば
れたと思った
サヴァラン^{※12}のように我がサハンドの背後を支え、わたしは高みへ上った
急流を目にして、わたしは後を追った
ジョシュグン^{※13}の血も煮えたぎった——わたしに達する響きある声
あなたたちの声は、すべてがひと息となる
バクーの山脈も声合わせ、湧き上がる鬨の声
向こう岸の咆哮は、こちらの岸でも復讐を果たすかのように
狼は老いて死を待つ身
ラヒム^{※14}は鉄砲を撃ち放ったと雄叫びをあげ
急流が押し寄せ河に混ざった
リュスタムの砲弾は唸り、爆音が轟いた
我らのなかに薔薇の花芽が広がった
懼れるな、わたしがいるぞ！との声で、同胞はわたしに命を吹き込んだ
わたしに、命には命をと——敵に、血には血を、と同胞は言った
わたしを王者と同胞は呼んだ
この命、君に捧げようと同胞は言った——わたしのこの命も声を上げ応えていた
万歳！ 勇敢な羚羊が山からあなたがたに言った、同胞よ
人々はあなたがたを豹とよぶ、同胞よ
山はあなたがたを獅子とよぶ、同胞よ
ヘイダルババの背後には果てしない山脈が連なっている
山と山脈は支え合っている
我がアラズは鏡、そこに燈火を置けば、明るく光を放つ
向こう岸に叫びがあがれば、皆心を耳にする
同胞よと駆け出せば、頭は脚となる
駆け寄り、アラズで向き合えば、眼はまた泉となる

悲しみはまた花束となる
我らの言葉の手本はまたひとつになる
^{ゆかり}所縁の香気を感じ取るも、この手を延べることを得ず、我が愛は動揺していた
今や悲愁は褪せて、黒は白になる
アラズの乳の湖は溢れ、岩山は庭園になる
黄金色の麦の穂を刈る鎌は、巻き毛を撫でる櫛になる
シロツメクサの野原はまた春、夏、鶉に寢床を設える
涙は眼に灯りを点す
チューリップは終わり、頬になり
花芽は微笑み唇となる
右であれ、左であれ
すべてはひとつになった

我が同胞、我が守護者らを目にして、残忍な狩人はその身を恥じた
激流のごとき圧制者は打ち負かされ、流れを絶たれ、細って小川になった
薔薇は目の涙を拭った
網をかける狩人は、馬が逃げ去り、後へ退いた
罌を残して姿を消した

121

しかしヘイダルババも知っている、我らのようにすべては燃える
腕に腕を鎖で縛られ、雲は哭く
わたしは何を知ろうか？ 天然自然もあさましい日々に哭いている
偽りの道が開けば、真義の腕を縛る
至誠の胸は創傷に悶える
山に棲む羊、隼、羚羊、鹿
すべては落魄^{らくはく}し、疲れ、胸を痛め、傷ついている
薔薇も花開けど蒼褪める

否、そうではない！ 山脈は必ずやまた立ち上がる
審判の日来れば、山脈は皆火山となる

むご 酷い世界は燃えて血^{まみ}塗れになる
 ああ、なんたる嵐の吹くことか

君は言う、「わたしこそ、傷つき、アーザルの民の焦がれを生きる者
 焦がれてわたしは薔薇の花と咲く、わたしこそ永遠の愛
 記憶がわたしを捨てるなら、己が花園のビュルビュルにわたしはなろう
 我が民はペルシア語で苦悩を語るが、わたしこそが言語
 真実のためには、いかばかり闇が深かろうと、わたしこそ人々を導く灯り
 わたしこそ文芸の薔薇」

ま^{だる} 間怠くも行商人は宝玉の何たるかを解さぬまま
 文化の習わしが無智蒙昧に塗れようと心痛めることはない
 日が訪れようとすぐ陽は沈み、夜陰から醒めることもない
 あるがままの己の姿を嘆くこともない
 人たることを捨てようとも、欺瞞の種族に逆らうことを得ず
 ひと日に姦計を為さねば、夜に安んじて眠ることを得ず
 人と相和することもない

けれど、わたしの前に心確かであれ、栄えあるサハンドよ
 勇猛な羚羊の棲む我がサハンドよ
 いと高き御空のその陰にのみ、わたしの頂く冠はある
 ムーサーのようにファラオを恐れず、手に木の杖がある^{※16}
 わたしに咎はなく、わたしには安逸がある
 わたしはアリーの子、自由な人々の勇士、その宿願
 闇を照らす灯り
 光明への導き
 真実と信仰への伝道者
 わたしは、頭に貫くことを得ぬ盾を、刃の鈍らぬ剣を手に行っている

【訳者注解】

※1 ハルヴァとは、小麦粉等の粉にバターやギーなどの油脂、そして砂糖、ナッツ、果物などを加えて作られる中東・西アジアに広く伝わる菓子。

※2 翻訳資料「ヘイダルババ」第74篇を参照。

※3 翻訳資料「ヘイダルババ」第3篇を参照。

※4 ダマヴァンド（ペルシア語 Damāvand）とは、テヘラン近郊に位置し、アルボルズ山脈に連なる火山の名前。標高は5,671メートルでイランの最高峰であるとともに、中東で最も高い山として知られる。Encyclopaedia Iranica <https://iranicaonline.org/articles/damavand> (2022年12月11日閲覧)

※5 ビュルビュル（アゼルバイジャン語 bülbül/ ペルシア語 bolbol）とは、詩語として、鳴き声の美しい鳥を定型的・象徴的に示す名称。しばしばナイチンゲール、小夜啼き鶯等々と訳されてきた。

※6 Farrukhī Sīstānī のペルシア語古典詩にある

با کاروان خُله برفتم ز سیستان با خُله ی تنیده ز دل بافته ز جان

「新しく仕立てた服 (holle) のキャラヴァンとともに私はスイースターンを発った / 心で紡いだ新しい仕立ての服、命で編んだ服」の詩句を踏まえたもの。

※7 ミルザ・アラクバル・サービル Mirzā Ələkbər Sabir (1862-1911) は帝政ロシア時代にシャマハに生まれた風刺詩人。1906年創刊の風刺誌『モッラー・ナスラッディン Molla Nəsrəddin』への寄稿で知られる。

※8 ここでいうシルヴァンはサービル生誕の地であるシャマハのこと。

※9 アラビア語の hūr. クルアーンの天国描写に登場する。

※10 ハールートとマールートとは、クルアーン第2章102節で言及される天使の名前。人間に魔法を伝授したとされ、また地に下って墮天使となって美しい女性の虜となって人を殺害したことで罰せられたという伝説もある（『岩波 イスラーム辞典』参照）。

※11 「ダダ・ゴルグトの書 (Kitab-i Dədə Qorqud)」は、北東アジアからオグズ・トルコ族が西への民族大移動を続けた時代を背景にした民族的英雄たちの武勲のエピソードや家族像を幻想的に描く叙事詩。詩人サハントは、このダダ・ゴルグトの物語から、二つの詩集『我がサズの言葉 Sazımın Sözü』、『我がダダの書 Dədəmin Kitabı』の各々に三語ずつ独自に韻文化したものを収めており、これが「サハントの『ダダ・コルグト』」として知られている。

※12 サヴァラン アゼルバイジャン語 Savalan、ペルシア語サバラーン Sabalān。イラン・アルダビール州にある火山（標高4,740m）。

※13 ジョシュグン Hüseyinqulu Katip Coşğun (1910-90) は東アーザルバーイジャン州のマラーゲ生まれの詩人。

※14 ラヒム (Məmməd Rəhim, 1907-77)、リュスタム (Süleyman Rüstəm, 1906-89)。いずれも当時のアゼルバイジャン・ソヴィエト社会主義共和国の詩人・劇作家で、シャフリヤールとイランで会ったのち韻文書簡の交換があった。

※15 アラズ(Araz)は、アラス河のアゼルバイジャン語表記。イランとアゼルバイジャン共和国の間に流れている河の名前。19世紀のガーギヤール朝ペルシアと帝政ロシアの戦争の結果として、イランがアラズ河以北のコークサス領をロシアへ割譲して以後、この河が現在に至るまでイランとアゼルバイジャンの国境と概ね一致している。

※16 クルアーン2章17-18節。

時の声

Zaman Səsi / زمان سسی

朝が来た——あらゆる方角から湧き上がるアザーンの声
 それは、あたかも天使の唱えるクルアーンの声
 それに比すべき声をぼくは知らない
 それは生命の声——もし聞きとれるなら
 幼い日々祖母に抱かれ寝付くような
 おやすみ、おやすみと呼びかける母の優しい声
 さあ目を覚まそう……もうたどり着くから、と旅路のぼくに呼びかけ
 駱駝の鈴を鳴らし、過ぎてゆくキャラヴァンの声
 牧童が子羊を放して、山で奏でる葦笛
 子羊の耳に夢をはぐくむ羊飼いの声
 身体は老いても、ぼくの愛が老いることはない
 いま耳に鳴り響く若い声
 時は力士のように、ぼくを地に投げ倒した
 ぼくの詩、ぼくの書くものは、くずおれる勇士の声
 しばし耳を傾けよ、世の終わりの時——天を震撼させる
 諸々の国民の叫び、助けを呼ぶ、訴える声
 人は秋にのぞむ——落ち葉のようにこぼれてゆく命
 こぼれてゆく落ち葉に慟哭する秋の声——サズの音のように
 ぼくは四十年囚われの身——あの潤いある声もやつれ果てた
 味気なくとも、ぼくの声を受けてくれ
 ぼくも声をあげれば、口を衝くのは容赦ない言葉
 怒る人々、湧き上がる容赦ない言葉
 録音テープを満たそう、どうか残って欲しい——いつの日かこの子らが
 歓喜の裡にぼくらが残した声を讃えるように
 声に磁石があれば惹きつける——革命をしかと眼にとどめよ
 自由を勝ち得た「わがサルダル」^{*}の勇猛な声

人は老いれば耳が重くなる
あたかも哀れな耳に轟く時の声
しばし見よ、深い沈黙の朝、どの録音テープだろうか
この永遠の声を捉えて残すことができるのは
シャフリヤールよ 口笛を吹くものたちもぼくを咬む
ぼくは口笛に似た蛇の声をどうするのだろう

【訳者注解】

※「わがサルダル」 イランにおける立憲革命を護った功績を讃えて「国民將軍（サルダーレ・メッリー）」の称号を贈られたサッタール・ハーンを指す。講演録本文16頁及び注14を参照。

わたしは海をつくった

Dərya Elədim / دریا الله ديم

トルコ語が小さな泉なら、わたしはそこから海をつくった
 酔漢の一群を、世の終わりの審判に喚問される人だかりにした
 遠いスハー^{※1}星^{かす}の幽かな光は目に見えないが
 それをわたしは涙ながらに昴星^{※2}の首飾りにした
 わたしの希^{のぞみ}は、その海が大洋になること
 わたしは誓いを立てて、この大地をつくった
 叡智を極めることがなければ、詩も高貴の行いも残らない
 わたしとても叡智に到達し、わたしの詩を永生^{ながらえ}させた
 わたしは久遠の時へ近づいた——ハーフェズの傍らに昇りたいもの
 シーラーズのシャーチェラーグ^{※3}をタブリーズに捧げた
 恥知らずの悪鬼が「トルコ語」の命を奪った
 わたしはその命を取り返し、真実のために蘇らせた
 ハーフェズのように、大天使の恩寵の助けを得て
 わたしは救世主のなしえたことを、なしとげた^{※4}
 不実なものたちの短刀は、口のなかで浅ましい言葉になったが
 わたしは喜びをもって、短剣をナツメヤシの実にした
 今は天上に美女らが並び、漫ろ^{そぞ}歩く
 汚水を泳ぐアヒルたちを、わたしは鶴にした
 見よ、ヘイダルババは伝説にみるような、ガーフの山になった
 わたしはひとつの小山を不死鳥の赴く処にした
 わたしはここにロヴシェンザミルの識見^{※5}の碑を建てた
 わたしは彼のペンをも、物言う鸚鵡にした
 わたしの慧眼のペンはイランにひとつだけ
 見よ、トルコで、ガフガーズでいかばかりの歓声をわたしは浴びたか
 見よ、テヘランでどれほどの賢人たちが魅せられたか
 見よ、タブリーズでどれほどの詩人たちをわたしが虜にしたか

「サハンディエ」^{※6}はサハンドの山に頭を高く上げさせた
 わたしはまた我が同胞の権利を実現した
 ハンザル^{※7}の苦い言葉さえも甘美なトルコ語になっていた
 わたしは甘美なトルコ語とそれを混ぜ、ハルヴァにした
 過ぎた時から残されていたのが蜂の巣の房なら
 わたしはそれを溶かして蠟から精製し、
 純粋なシャウフディ・ミュサッフア^{※8}の蜜を取った
 伸かけて、トルコ語は子を愛撫する母たちの、子守唄の言葉
 わたしの悩みを、この葉でわたしは癒した
 シャフリヤールよ、残念ながらこの粉挽き場は今も空いている
 悪気のあるものを引き寄せることはなかった わたしも悪意を呑ん
 で笑いを繕ったのだ

【訳者注解】

※1 スハ一星 アゼルバイジャン語 *süha ulduzu* <アラビア語 *suhā'*。大熊座の傍らに位置してかすかな光を発する星。遠い昔にはこの星が見えるか否かで視力を検査していたと言われる。

※2 原文 *üqd-i Süräyya* (ペルシア語 *uqd-e Soraiyā*) はペルシア語古典抒情詩の大詩人ハーフェズの詩を踏まえた表現。またソライヤーとは、若き日の作者の実らぬ恋の相手となった女性の名でもある。シャフリヤールは他のペルシア語作品でも、このハーフェズの詩を踏まえながら、昔の恋人の名前を追想している。

※3 シャーチェラーグ (ペルシア語 *Boq'e-ye Shāh Cherāgh*) イランのシーラーズにあるシーア派の霊廟。マシュハド、ゴムと並んでイランのシーア派巡礼地として重要視されている。西暦9世紀にアッバース朝カリフに殺害されて殉教したセイイェド・アフメド・エブネムーサーを祀っている。

※4 ハーフェズが、そのガザルのなかで「大天使(ガブリエル)の恩寵が再び助けてくだされば、他の人びとも救世主(イエス)がしたことをなしえよう」(黒柳恒夫訳)と詠んだ詩句を踏まえたものである。イエスが死者を蘇らせた奇跡を――ハーフェズに倣って――詩という言葉の芸術のなかで「トルコ語」の失われた命を取り返した、作者のアゼルバイジャン語詩における自負を端的に語る詩句といえよう。

※5 ロヴシャンザミル (Mehdi Rövşənzəmir) は『ヘイダルババ』初版の序文寄稿者

※6 「サハンディエ」はペルシア語で「サハンドに関する詩」を意味し、ここに訳出した「サハンドよ (Səhəndim)」(アゼルバイジャン語)を指す。また後年イラン革命の前にサハンドが世を去ったときの追悼詩として詠んだ長大な「サハンドとアーザリーの詩 (Sahand va She'r-e Āzar)」(ペルシア語 一種の評論)も「サハンディエ」の範疇と考えられている。

※7 瓜や西瓜に似た果実で非常に苦い味がする。一般に有毒とされている。

※8 蜜蠟を分離精製した純度の高い蜂蜜のこと

バフティヤル・ヴァハブザーダ Bəxtiyar Vahabzadə

ギュリュスタン
Gülüstan

——アゼルバイジャンの統一と独立のために闘ったサッタール・ハーン、シャイフ・マハムマド・ヒヤバーニー^{*1}、ピーシェヴァリーの尊い思い出のために——

絹の肩掛けでそっと
拭いた眼鏡をかけた
前に屈んで、おもむろに卓上の
印章を、片腕を一瞥した
心構えはできた、紙に手をかけた
口許に笑みを浮かべ
一本の筆が世紀の離別を創った
ひとつの民を、刀の一閃で半々に割いた
まさに羽根飾りのついた筆の尖った先端が
アゼルバイジャンの胸を穿ったのだ
アゼルバイジャンは頭を擡げた
結局いつでも
アゼルバイジャンの声は断たれた
紙に手を伸べたとき、彼は笑った
離別を嘆く心からの声に慈悲はなかった
真実のために絶えず戦う民の
歴史的な悲劇を笑った
傍らには髭の濃い大使が座し
時折、通訳に問いかける
左を向き、右を見て
首を振りながら、数珠を手繰り
締約の条項にご同意を、と
取り巻く者たちが腕を伸べる

取り巻く者たちは誰だったのか
どちらも外国人だ
この民を外国人が救うというか
トミュリス女王^{※2}の霊を呼び起こせ
バーバク^{※3}の刀よ、再び煌めくがよい
この合意に言葉を向けよ
獅子の両手を鎖に繋いだのは誰か
いずこにいるのか、この国の健児らは
藪^{ひら}を拓け、路を拓け
いずこにいるのか、今世紀のコログル^{※4}その人は
そのコログルの刀は、そのコログルの声は？
父祖の飲び、名誉は、確かに
我らに託されている、重い預かりものだ
我らの血に民の栄誉は無いというか？
我らの父祖は、なおも託したものを護り続けるのか？
轟け、雷鳴、震えよ、世界
心よ、怒りのままに荒ぶるがよい、張り裂けよ
常に真実の路に刀を挙げた
勇猛な父祖の墓よ、砕けよ
誇り高い^{やまなみ}山脈よ、頭をさげよ
偉大な国民への弔歌がはじまった
水の豊かな泉よ、哀悼歌を唱えよ
娘たちよ、花嫁たちよ、^な哭き歌をこの日に呼び起こせ
取り巻く者たちは黙している、怒りはない
逝った者たちには関りのないこと
互いに署名を交わし、あたかも
恋文のように腕を伸べる
皆が書面の頁ごとに署名する
黙して席へ戻って腰をおろし
眼鏡の貴紳と数珠をもつ大使

起立して互いに手を差し伸べる
彼らがひとつに握り合ったこの手が
ひとつの国民、ひとつの祖国を二つに分けた
おお祖国よ、お前の眼からは涙がはらはら零れ
この恐ろしいありさまに何と言うか
誰も言わない——止めよ、各々方
この国には自明の所有者がいる
貴方がたは、さきほどから何を書いているのか
この大地の所有者はいずこにいるか？
真実はいずこ、法はいずこ
この大地の歴史は、齢は遠大だ
その胸のどこに境界を引こうとしたのか
唯一無二の国——二人の同胞
この別離を、この不幸を目にして
彼らの言葉は何、彼らの真意は何？
この民は始めから苦患に墜ち
生誕の地にあらざれば、奴婢ではないか？
どうして爪を肉から
心を身体から、命を軀から引き離すのか？
誰が貴方がたにその権利を認めたか
誰が貴方がたを呼んだのか——我らが祖国へ？
何時、彼らは塹壕で唸っていたのだ
彼らはギュリュスタンの町で取引をしたのだ
ひとつの国をふたつに
引き裂いてやろうと言って
あの日、空に雷鳴が轟いたという
草原を、曠野を雲が絡めた
あの空で唸るはオグズのハン^{※5}
その霊がいたのだろう、激しい慟哭、絞り出す叫び
ギュリュスタンの町の薔薇と花々は

ひと日のうちに黄色く色褪せ、萎れた
「^{ギュリュェスタン}薔薇の園」は閉ざされ、あの日から
この村の額に傷痕がひとつ残った
心胆が焰に朽ちた「火に包まれるカラム」^{※6}
サズの弦が嘆いた、燃えて、燃え尽きたと
アシュクのサズはさらに哀愁を帯び
渴望のヴェールをさらに紡ぎ出す
まさにその日、急流と水が国をおし流し
陽も月も顔を翳らせた
聖なる樹木の愛と希は^{のぞみ}
あの日、アルバ河の水に没しなかったか
山脈から吹く風は哭いていた
この不吉な報せを世界へ広めた
あたかも薔薇が、花々が、言葉を語り
「この所業に署名した手が試練を与えた」
アラズの水は憤怒に狂って暴れ
甘美な歌は、呻きに、叫びに
祖国よ、鳥に似たお前の翼は
一翼がこちらの岸に、一翼は向こう岸にある
鳥は両翼で飛び、高く舞い上がる
わたしは片翼だけで、どうして飛翔できようか
心はこの苦悩から憤激し
我らの眼から涙が零れる
閣下、一瞬たりとも思い及ぶことはなかったのか
貴方がたがくだした判決の重みに
この判決の恐怖は五十か、百か
我らはこの脅威をいかに除くのか
この誇り高い民が、首を搔かれんと
心から発する叫びを感じることはなかったのか
偉大なフエズリ^{※7}、勇猛なバーバクが

はつむ

撥無の声を耳にしなかったのか

閣下、インクのひと滴で、貴方がたは

何に署名したのか、考えられたい

ひと滴のインクが、ひとつの国民を

その血に染めて引き裂いた

ひと滴のインクが涙となり

何年にもわたって眼から流れ、注がれた

我らの榮譽に千の傷痕をつけた

我らは多くを与えたが、それでもご主人様はまだ求める

まこと我らに善くしてくれたもの……我らを

ある者は「^{バラン}葡萄」と呼び、ある者は「^{ハル※8}驢馬」と呼び

我らを喰らい、我らの上に乗る

それでも背後にまわれれば我らが気に入らない

判決を心に留めよ、それがどれほど重いものであったか

印章を紙面に繰り返し押し押した

否、紙面ではなく、アゼルバイジャンの

胸元に山のごとく積み上げた

署名し、印章を押した、ああ、生命なき紙

その力、その威力はいかに強大であったことか

数世紀にわたって闘おうとも

その判決を揺さぶることを得ず

おお、紙片よ、はじめは無であったのが

書き込み、署名が為されれば、お前は無から存在を得た

偉大なひとつの民族の首を掻き

腕を縛る支配者にお前はなった

ひとつの国をお前は引き裂いた

紙そのものでしかなければ、そうはならない

お前の胸に書かれた心の焰から

なぜお前は火に包まれず、燃えなかったのか

アラズは国境となった——風が吹いた

水は川床から盛り上がり、荒ぶっている
上に枅目が書かれた板と杭
河の傍らに整列して並んでいる
水よ、お前たちより清浄なものは、世界に何があろう
一点の疵もない、お前たちの心
お前たちの心に着火し、燃えることはない
この汚辱の所業にお前たちは手を貸そうとするか
ああ、アラズよ、水の飛沫^{しぶき}はお前の涙
流路を過ぎては、曠野に、草原に
望みを遮られて
なぜお前の水は枯れなかったのか
こちらの岸にわたしは立ち尽くし
親愛な同胞よと言い、向こう岸もまた親愛なる者よ、と応える
おお時よ、わたしの問いに答えてくれ、なぜ
わたしの声は、往くべき処へ、わたしの手は、到達できないのだ
わたしの眼中で混ざる、世界が混ざる
痛みが痛みを切り刻み、悲しみは悲しみに交差する
アラズの上をわたしは通れない
アラズはわたしの痛み、わたしの胸に交差する
板と杭は地表ではなく
フズリの詩集のうえに打たれたのだ
ふたつに裂かれて百年、百五十年の歳月の
ガライル、バヤト、ムガム、シカスタ^{※リ}の
鉄の隔壁が――わたしの愛、わたしの希^{のぞみ}
わたしの歴史、わたしの伝統すべての上に立てられた
ふたつに裂かれた、わたしの命、わたしの心
ふたつに裂かれた、アラズの水
板と杭が打たれた、ああ、ああ
わたしの心臓、わたしの魂、わたしの言葉のうえに
我らが泣くも笑うも、つまりは

ひとつのサズ、ひとすじの弦のうえ
心から心への橋とは？　しばし待つが良い
我らの苦悩がサズのうえで語りだすなら
傷ついた詩句からシャフリヤールが
アラズのうえに橋を延べたのではなかったか
こちらの岸から向こう岸へ流れる急流に似た
眼に見えない心の弦を
それはこの急流を前に、川も杭も
百年來断ち切ることを得なかったもの
協定を結んだ老翁たちは知らずとも、この大地はひとつ
タブリーズもバクーもアゼルバイジャンなのだ
この民の魂を、言葉を
紙のうえで切ることはたやすいこと
切るがよい、紙面で——切るがよい、日と夜を
大地に杭を打ち込むがよい
力と意志を注ぐがよい
兵隊と武器ですべての方位を囲い込め
大地をふたつに分けても、それでも
身体を命から引き離すのは困難だ
引き離そうとは、誰にも容易いことではない
ひとつの民の心憂うこともひとつ
向こう岸からこの岸へムスタファ・パヤンが
ヴァヒド^{※10}のガザルを歌っている
時は巡り、世紀は戻る
詩人たちはふたたび言葉で火を注ぐ
ヴルゲン^{※11}の焦燥の歌に応えて
シャフリヤールはタブリーズの民から声をあげた^{※12}
「ヘイダルババ　空は一面霧に蔽われた
日々は過ぎたときよりも禍々しい
わたしたちが散り散りにならないよう乞い願う

善きものはこの手から奪われた
わたしたちの日々は惨めに落魄した」
「荒々しいこの風に吹かれて飛翔したい
山すそをゆきかう流れに身を任せたい
遠くへ去った親愛な人々のために涙したい
わたしたちを解りあえなくしたのは誰なのか
わたしたちの地で——去った友は誰なのか、残った友は誰なのか」

【訳者注解】

※1 ヒヤーバーニー (Mohammad Khiyābānī, 1880-1920) はイランで「自由の地 (ペルシア語表記アーザーディースターン Āzādīstān/ アゼルバイジャン語表記アザドゥスタン Azadistan)」と称するアゼルバイジャンの地方政権を樹立した政治指導者。タブリーズの西にあるハーメネ出身。イランの立憲制回復後の第二次議会以後、議員に選出され政治活動を本格化させ、社会民主主義系のデモクラート党を再建し、タブリーズをはじめとするアゼルバイジャン州内の重要都市での政治的地盤を獲得した。1919年のオスマン帝国侵攻以後、イランへの外国勢力による植民地化の排除、地方を基盤とする憲政回復・民主化を主張してタブリーズで蜂起。1920年6月にアーザーディースターンを宣言した。しかしヒヤーバーニーは地方発の人民統治主義への支持を広汎に得られず、中央政府との政治交渉や国内他地方との共調の不調によって孤立に陥り、同年8月にアゼルバイジャン州知事として派遣されたメフディーゴリー・ヘダーヤト (イランの大家作家サーデグ・ヘダーヤトの親戚筋。パフラヴィー朝時代に首相も務めている) による軍事的攻勢の前に殺害され (ヘダーヤトは自殺であったと主張している)、アーザーディースターンは瓦解した。アゼルバイジャン共和国の歴史認識では、ヒヤーバーニーは、イラン支配下のペルシア主義的ショーヴィニズムに抵抗し、アゼルバイジャンの民族的な自主独立に殉じた英雄のひとりと目されている。

※2 トミュリスはカスピ海東岸のマッサゲタイ人の女王で、息子を謀って死に追い遣ったアケメネス朝のキュロス大王 (キュロス2世、在位 BC559-530) に戦いを挑んで敗死させたと伝えられる。ヘロドトスの『歴史』に記述がある。

※3 バーバク (ペルシア語 Bābak Khorramdīn/ アラビア語 Bābak al-Khurramī) はイランがアラブに制圧された後、現在のイラン東アゼルバイジャン州カレイバルにある山城で20年にわたってアッバース朝に抵抗を続けるも敗れて捕らわれ、カリフ、アル＝ムタスィムの命で838年にサーマッラーで処刑された。アゼルバイジャン共和国では、バーバクをアゼルバイジャンの自主独立を守るべく闘ったトルコ人の民族的英雄と受け止めている。

※4 「ヘイダルババ」第74篇の作者注解及び訳者注解を参照。

※5 オグズとは、伝説上の英雄オグズ・ハンを名祖とし西暦9世紀頃に中央アジアの北から所謂シルクロードに沿って西に民族移動したテュルク系の部族集団。そこに属する24の氏族からセルジューク朝などのイスラーム王朝が現れた。

※6 カラムはアナトリア、コーカサスに広く知られる悲恋物語「アスリとカラム (Əsli və Kəram)」の主人公。アルメニア・キリスト教徒の司祭の娘アスリと恋仲になったイスファハーンの王子でムスリムのカラムは、宗教の違いのために引き離された恋人を追い求め、艱難辛苦の末に結婚にこぎつける。しかし新婚初夜に父の司祭がアスリに贈った衣装は、釦に魔法が掛けられて、これを外すことができぬカラムは焦燥の溜息を吐き続けるあまりに全身が焰につつまれて灰になってしまう。20世紀にマヤコフスキ風のトルコ語新体詩を創造したナーズム・ヒクメットの有名な詩篇「ケレムのように」は、この情熱のあまりに焰で燃え尽きる恋人の物語を踏まえている。

※7 フェズリ (Füzuli Məhəmməd Süleyman oğlu, 1494-1556) は、現イラクの生まれで、オスマン帝国のスレイマン1世の庇護下でトルコ語、ペルシア語、アラビア語による詩作を行った。オスマン朝詩の大家と目されると同時に、アゼルバイジャン語古典詩形成に大きく貢献した大家であるとアゼルバイジャンでは考えられている。

※8 バラン *baran* はタブリーズ方言のアゼルバイジャン語で葡萄、葡萄の生る樹の意味。ハル (ペルシア語 *khar*) はイランで驢馬の意味だが、俗語ではバカという意味である。

※9 ガライル、バヤト、ムガム、シカスタとは、アゼルバイジャンの伝統的な詩の韻律形式及び伝統音楽ムガムにおける旋律法の分類名称。

※10 アリアガ・ヴァヒド (Əliqə Vahid, 1895-1965) は、ソヴィエト時代のアゼルバイジャン語詩人。フェズリ影響下の古典詩体を活かして共産主義的価値観を詠む詩を多く作った。

※11 サマド・ヴルグン (Səməd Vurğun, 1906-56) は、ソヴィエト時代のアゼルバイジャン語詩人。独立後もアゼルバイジャンの国民的詩人として愛読、愛吟されている。

※12 ここはシャフリヤールの連作詩「ヘイダルババ」の第69篇と、第71篇の詩篇を直接原文のままで嵌め込んだものである。

底本 Vahabzadə, Bəxtiyar. [2004]. Seçilmiş Əsərləri. Bakı: Öndər Nəşriyyat.

ブルド・ガラチャール・サハンド

詩人サハンドがヘイダル・アリエフ（当時ソヴィエト連邦共産党中央委員会
Sovet İttifaqı Kommunist Partiyası Mərkəzi Komitəsi, Sov.İKP MK の政治局員、アゼル
バイジャン共産党中央委員会 第一書記）に宛てた韻文書簡

1974年7月28日 モスクワにて

我が師ヴルゲン^{※1}に言葉を乞い
わたしの詩をこのように始めよう
あの才気溢れる詩人が詠んだように
わたしは幼子ではなく、十分に歳を重ねている

暑いも寒いも人生で識り
自らの手で焔に命を育み
難局もわたしを抑えることを得ず
漆黒の闇も我が道を遮ることを得ず

すべて際どい危難と格闘し
同志、同胞と称し、このわたしは参上した
心の函^{はこ}を貴下に開陳せんがため
旅に武器を携え、このわたしは参上した

苦難^{やまなみ}を忍んで山脈を抜け
ついにタブリーズからバクーを踏み破った
誰にも胸襟を開くことなく、存念を忍んで
また帰還を余儀なくされた

運命に遺恨を抱いてはならぬ
我が手を見る、我が眼は明晰
我が運にあらねば、なんとすべきか
わたしはバクーで、貴下にこそまみえたかった

貴下の名声を聞いたものの
貴下にまみえることは叶わず
わたしはファルハドのごとくビスュトゥン^{※2}を穿ち
終には水が届くも、水路を潤すことはなかった

共に同胞として生まれ
座して貴下の言葉を聞き、また語りたかった
理想を同じくする同志として
母なる祖国^{ヴァタン}から言葉を発したかった

貴下の故郷バクーに
わたしは留まることを得ず、駆け去り、わたしは還った
そこにわたしはいないまま、愛おしい巢よ、哀しいかな
翼を広げ、飛び、わたしは還った

138

不幸なものが山に姿をみせれば
陽は隠れ、山は霧に包まれる
拳句に囁く海へ至れば
夏の日に、熱い水は凍てつくだろう

同胞よ、相まみえることが叶わなかったのは定め
我らが心はいかに昂ったか
我らの運命がこうならば
我らの運は奇なるもの

ご健勝をお祈りし
いつの日か、必ずや互いにまみえよう
願いはついには叶うだろう
今は心と心でまみえんことを

時来ればサハンドの言葉をお聞きあれ
サハンドの声は、貴下の民の声
できるなら色褪せた薔薇の香とともに
それはヴァタンの息遣い、祖国の息

今日、我が民族が頼みにするのは貴下のこと
我が民の糧を
したまえ
すべての世が立ち尽くし、震撼する
貴下に眼差しを注いでいる——貴下の祖国のすべてが

【訳者注解】

※ 1 136 頁「訳者注解」※ 11 を参照。

※ 2 113 頁「訳者注解」※ 7 を参照。

底本 SƏHƏND Bulud Məşədi Mütəllib oğlu Qaraçorlu. [2006]. Seçilmiş Əsərləri. Bakı: Şərq-Qərb

編集スタッフ

編集・制作：渡邊円香

本文デザイン・装丁：松村紗恵〈(株)ブラメイク〉

協力：西道奎／中岡ひろみ／呉玲奈〈(株)ブラメイク〉

ワタン／Homeland スタディーズ②

ふるさとの^{やま なみ}山脈によせる頌歌

シャフリヤールとアゼルバイジャン語詩

2023 年 3 月 1 日発行 初版第 1 刷発行

編 者 岡 真理

発行所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院 人間・環境学研究科

岡 真理研究室気付

電 話 075-753-6728

ISBN 978-4-908679-14-8

印刷／製本 (株)コームラ

出版協力 (株)ユニオン・エー

©Mari OKA, 2023 Printed in Japan

本書は、科学研究費基盤研究 (A) 「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文
学的、領域横断的研究」(20H00006, 代表：岡真理) の成果の一部として、科研費で作成されました。